

2022年度 3月修了 修士論文

英仏米のプロラグビーリーグから見たリーグワンの成長策

Development of Japan Rugby League One
Referring to Premiership Rugby, TOP14 and Major League Rugby

早稲田大学 大学院スポーツ科学研究科

スポーツ科学専攻 トップスポーツマネジメントコース

5022A310-1

五郎丸 歩

研究指導教員： 平田竹男 教授

目次

第1章	背景	1
第1節	筆者の立場	1
第2節	RWC2019 への歩み	1
第1項	RWC2019 開催決定以前の日本のラグビー界	1
第2項	RWC2015 に向けた日本代表の取り組み	1
第3項	RWC2019 での成果	1
第3節	世界のラグビーリーグ	2
第4節	問題意識	3
第5節	先行研究	3
第6節	目的	3
第2章	方法	4
第1節	PR、TOP14、MLR、リーグワンに関する調査	4
第2節	現地調査	4
第3節	当事者の経験	4
第3章	結果	5
第1節	Premiership Rugby	5
第1項	歴史	5
第2項	リーグ戦の開催方式	7
第3項	試合日程	7
第4項	クラブの分布	8
第5項	スタジアム	9
第6項	放映権	10
第7項	サラリーキャップ	11
第8項	試合出場のルール	14
第9項	トゥイッケナム・スタジアム	15
第10項	RWC	16
第2節	BRISTOL SPORTS の取り組み	16
第3節	TOP14	21
第1項	歴史	21
第2項	リーグ戦の開催方式	21
第1項	試合日程	21
第2項	クラブの分布	22
第3項	スタジアム	22
第4項	観客動員数	23

第5項	放映権	24
第6項	サラリーキャップ	24
第7項	外国人制度	25
第8項	スタッド・ドゥ・フランススタジアム	25
第9項	クラブの収入構造	26
第10項	RWC	29
第4節	RCToulon の事例	30
第5節	MLR	31
第1項	歴史	31
第2項	リーグ戦の開催方式	33
第3項	試合日程	33
第4項	クラブの分布	34
第5項	スタジアム	35
第6項	シングルエンティ	36
第7項	放映権	36
第8項	デジタルマーケティング	37
第9項	RWC	38
第6節	リーグワン	39
第1項	歴史	39
第2項	リーグ戦の開催方式	43
第3項	試合日程	43
第4項	クラブの分布	44
第5項	スタジアム	44
第6項	観客数	49
第7項	マーケティング	49
第8項	外国人制度	50
第9項	アーリーエントリー制度	54
第10項	RWC	55
第4章	考察	60
第1節	英仏米の特徴からみるリーグワンの強みと課題	60
第2節	ラグビー専用スタジアムの有効活用	61
第3節	シングルエンティティ	61
第4節	リーグと代表戦の日程	62
第5節	RWC 再招致に向けた理念の設定	63
第6節	本研究の限界と今後の課題	64
第5章	結論	65

図表目次

図 1 PR のキックオフ時間(2021-2022) ; PR 公式データより筆者作成	8
図 2 PR のクラブ別平均入場者数(2021-2022) ; PR 公式データより筆者作成	8
図 3 PR のクラブ分布 ; PR 公式サイトより筆者作成	9
図 4 PR 各クラブのイングランド人選手の割合	13
図 5 PR 各クラブのイングランド以外の出身者比率(2017-18 シーズン)	14
図 6 BRISTOL SPORTS の事業体制 ; インタビュー結果より筆者作成	17
図 7 ブリストルスポーツのスケジュール ; ブリストルスポーツ公式 HP より筆者作成	18
図 8 PR チーム別平均入場者数(2021-2022) ; 公式データより筆者作成	19
図 9 アシュトンゲートスタジアム ; Bristol Sports 公式 HP より引用	20
図 10 アシュトンゲートスタジアム ; Bristol Sports 公式 HP より引用	20
図 11 TOP14 のクラブ分布 筆者作成	22
図 12 TOP14 の決勝戦の観客動員数(1996-2022) ; TOP14 公式 HP よりより筆者作成	23
図 13 TOP14 のキックオフ時間(2020-2021)公式データより筆者作成	24
図 14 TOP14 各クラブ予算 2019-2020 シーズン)※チーム名は非公開 ; RAPPORT DNACG より	27
図 15 TOP14 各クラブ予算 2020-2021 シーズン) ※チーム名は非公開 ; RAPPORT DNACG より	27
図 16 TOP14 クラブ予算 2013-2022 推移 ; RAPPORT DNACG より	27
図 17 TOP14 のクラブの収支構造(2019-2020 シーズン) ; RAPPORT DNACG より	29
図 18 TOP14 のクラブの収支構造(2020-2021 シーズン) ; RAPPORT DNACG より	29
図 19 スタッド・マイヨール ; RCToulon 公式 HP より	31
図 20 MLR のキックオフ時間(2020) 公式サイトより筆者作成	34
図 21 MLR のクラブの分布 ; 筆者作成	35
図 22 リーグワンのクラブ分布 ; 筆者作成	44
図 23 J リーグのオリジナル 10 本拠地 ; 筆者作成	48
図 24 観客動員数推移(2014-2021) 公式サイトより筆者作成	49
図 25 チケットの購入者属性 ; 引用元リーグワン資料	50

図 26	THE CONOMIC IMPACT OF RUGBY WORLD CUP 2019 より引用	56
図 27	RWC の再開催とトリプルミッションの循環	63
表 1	RWC 大会日程 2007-2023 RWC データより筆者作成	1
表 2	イギリスの年間スケジュールと試合数；PR 公式 HP 等より筆者作成	7
表 3	PR のスタジアム一覧；各スタジアム情報より筆者作成	9
表 4	Premiership Rugby が放映されている国・地域；PR 公式 HP より引用	10
表 5	PR 各クラブのホームグロウンプレイヤーの比率	11
表 6	サラリーキャップの制裁；SALARY CAP YEAR 2021-22 より筆者作成	12
表 7	代表戦に出場した場合のルール	14
表 8	フランスの年間スケジュールと試合数；TOP14HP 等より筆者作成	21
表 9	TOP14 のスタジアム；RAPPORT DNACG より筆者作成	22
表 10	クラブ予算と選手給与(2019-2020 シーズン)；RAPPORT DNACG より筆者 作成	28
表 11	RWC で使用するスタジアム RWC2023 公式サイトより筆者作成	30
表 12	アメリカの年間スケジュールと試合数；MLR 公式 HP 等より筆者作成	33
表 13	MLR のスタジアムと芝生の種類	36
表 14	全国大学ラグビーフットボール選手権大会決勝/準決勝観客動員数；公式デー タより筆者作成	41
表 15	日本の年間スケジュールと試合数；リーグワン HP 等より筆者作成	43
表 16	関東 8 クラブの使用スタジアム (2022-2023)；筆者作成	46
表 17	関西 4 クラブの使用スタジアム(2022-2023)；筆者作成	46
表 18	RWC2019 使用スタジアムの陸上トラックの有無と J リーグクラブの使用状況	47
表 19	J リーグクラブの国立競技場使用回数 1993-2022；J リーグ公式 HP より筆者 作成	47
表 20	外国人選手のカテゴリー	51
表 21	第 10 条〔登録区分の要件〕	51
表 22	リーグワン 2022-23 選手登録区分；NTT ジャパンラグビー リーグワン 2022-23 選手登録区分についてより引用	52
表 23		53
表 24		53
表 25	日本ラグビーフットボール協会(以下、JRFU) 選手の移籍に関する規程 (学生クラブの選手の移籍)	55
表 26	ジャパンラグビーリーグワン(以下、JRLO) 選手契約および登録に関する規 程 第 11 条〔選手の追加登録〕	55

表 27	ワールドカップ開催国一覧	58
表 28	サッカーW 杯招致とスタジアム整備事例.....	58

第1章 背景

第1節 筆者の立場

筆者は元ラグビー日本代表として 57 試合プレーし、2015 年ラグビーワールドカップイングランド大会(以下、RWC2015)の出場経験を持つ。RWC2015 では、2 度の MOM(Man of the match)と、アジア人初となる大会ベスト 15 に選出された。同大会後には、SUPER RUGBY (ニュージーランド、オーストラリア、南アフリカ、アルゼンチン、日本の5カ国リーグ)のクイーンズランドレッズ(オーストラリア)、世界最高峰のリーグである TOP14 (フランス)の RC トゥーロンに所属した。国内では、ヤマハ発動機ジュビロに選手として所属し、現在は JAPAN RUGBY LEAGUE ONE DIVISION 1 静岡ブルーレヴズの CRO(Club Relations Officer)として運営業務に携わっている。

第2節 RWC2019 への歩み

第1項 RWC2019 開催決定以前の日本のラグビー界

1987 年に開催された第 1 回 RWC より、日本代表は全ての大会に出場するも 2011 年第 7 回 RWC ニュージーランド大会までの戦績は全 24 戦を戦い、1 勝 2 分 21 敗と、世界と大きく力の差を広げられる形となっていた。

第2項 RWC2015 に向けた日本代表の取り組み

RWC2015 イングランド大会では、初戦で強豪国、南アフリカ代表に歴史的勝利を上げ全世界に衝撃を与えた。中 3 日で迎えたスコットランドには、大差での敗戦となるも、強豪国と新興国の平等な大会スケジュールが組まれていない事に対し、大きな問題提起をする一戦でもあった。本大会は、世界に衝撃を与えただけではなく、RWC2019 日本大会に向けて、これまでラグビーへ関心の低かった多くの日本国民に、ラグビーの魅力を伝えるには十分すぎる大会であった。

第3項 RWC2019 での成果

2019 年ラグビーワールドカップ日本大会(以下 RWC2019)開催において、日本代表は予選プールを全勝で戦い終え、史上初の決勝トーナメントへ進出を果たした。自国開催という重圧の中で、ホスト国としての役割を全うしながらも、堂々たる結果で世界の強豪国と肩を並べるまでに成長を遂げた。日本国内では、日本代表の活躍なども大きく影響し多くの方々にラグビーという競技の本質を認知してもらえた大会でもあった。

表 1 RWC 大会日程 2007-2023 RWC データより筆者作成

	RWC2007	RWC2011	RWC2015	RWC2019	RWC2023
開幕戦	2007/9/7	2011/9/9	2015/9/18	2019/9/20	2023/9/8
決勝戦	2007/10/20	2011/10/23	2015/10/31	2019/11/2	2023/10/28
日数	44日間	44日間	44日間	44日間	51日間
試合数	48	48	48	45(3試合中止)	48
優勝国	南アフリカ	NZ	NZ	南アフリカ	-

第3節 世界のラグビーリーグ

世界のプロラグビーリーグを俯瞰すると、北半球 3 大プロリーグとして、ラグビーの母国イングランドの Premiership Rugby(以下、PR)とスコットランド・ウェールズ・アイルランド・イタリア・南アフリカ共和国のプロクラブが参加しているユナイテッド・ラグビー、そしてフランスの TOP14 が挙げられる。そしてこの 3 大リーグの上位クラブが出場する大会として、欧州ラグビーチャンピオンズカップが開催される。また中位のクラブが出場する大会として欧州ラグビーチャレンジカップが開催をされている。また、「シックス・ネ이션ズ」と呼ばれる、イングランド、フランス、アイルランド、イタリア、スコットランド、ウェールズの 6 カ国による国別対抗戦が開催されている。

また、南半球ではニュージーランド・オーストラリア・フィジーの 3 か国から計 12 のプロクラブが参加するスーパーラグビー・パシフィックが開催されている。スーパーラグビー・パシフィック前身である、スーパーラグビーには、2016 年シーズンから 2020 年シーズンまで南アフリカクラブのキングスと日本クラブのサンウルブズとアルゼンチンクラブのジャガーズが加わっていた。

さらに新興リーグとして、2018 年に米国で Major League Rugby(以下 MLR)が発足し、北米のトップレベルのチャンピオンシップとして位置づけられ 2022 年シーズンにはアメリカから 12 クラブ、カナダから 1 クラブの計 13 クラブによって行われている。米国は近年ラグビー人気低迷傾向にあったが、RWC2031 アメリカ大会開催が決定しており、今後の成長が期待されているリーグである。

そして我が国は、これまで続いたトップリーグから JAPNA RUGBY LEAGUE ONE(以下リーグワン)が RWC2019 日本大会を成功させた後の 2021 年 6 月 29 日に組織が発足し、2022 年 1 月に新リーグが開幕した世界のプロフェッショナルラグビーリーグの中では後発のリーグである。リーグワンは企業リーグからの脱却を目指し、前身のトップリーグではリーグにあった興行権がクラブに移管され、プロスポーツと同様に、クラブが試合を主催しチケット収入やスポンサー収入などを獲得することや、地域への普及貢献を事業として歩み始めた。

第4節 問題意識

ラグビー先進国であるイギリスやフランスと我が国を比較すると、スタジアムの環境やファンの盛り上がり等、選手やファンを取り巻く環境は、ラグビーの実力以上に差を感じている。

アジア初開催となった RWC2019 日本大会を大成功に終えたものの、国内リーグへ目を向けると、平均入場者数は 2022 年には新リーグ開催前よりも大きく落ち込みを見せており、リーグもクラブも手探り状態が続いている。今後、ラグビーの人気を維持向上させるためには、選手の受け皿であるリーグ及び、クラブの活性化が必要不可欠であると言える。そこで、主要国のリーグの取り組みを参考にしながら、リーグワンの成長策を検討していきたい。

第5節 先行研究

先行研究では Carlos et al.(2014)はフランスのラグビークラブのコストパフォーマンスについて、大西(2017)によってアメリカのラグビーについて触れているものの、世界各国の主要リーグの特徴と日本の国内リーグを比較検討した研究は行われていなかったため本研究を行うこととする。

第6節 目的

本研究は、ラグビーの世界最高峰リーグであるイギリスの PR とフランスの TOP14、新興リーグである MLR の取り組みを参考に、日本のプロラグビーリーグであるリーグワンの成長策を提示することを目的とする。

第2章 方法

第1節 PR、TOP14、MLR、リーグワンに関する調査

文献調査から PR、TOP14、MLR、リーグワンの 1.クラブの分布、2.スタジアム、3.試合日程 4.マーケティング活動 5.RWC の取り組みの調査を行った。

第2節 現地調査

PR のブリストル・ベアーズを訪問し、クラブ経営に対する考え方やスタジアムの活用状況。サッカー・ラグビー・バスケットの 3 競技が、ホールディングス化された BRISTOL SPORTS についてインタビュー調査を行った。

調査実施日は 2022 年 11 月 9 日に BRISTOL BEARS クラブハウスを訪問し、Team Manager： Jack Targett 氏と Chief Operating Officer： Tom Tainton 氏に対しインタビュー調査を行った。主に、クラブマネジメントやチケットティング、ブランディング等について質問をおこなった。

第3節 当事者の経験

筆者が 2017 年-2018 年に所属した RCToulon の経験を主に「ステークホルダーとの関係性」「ホスピタリティ」などの観点をまとめた。

第3章 結果

第1節 Premiership Rugby

第1項 歴史

1) ラグビーユニオンの発足とリーグの導入

ラグビーユニオンの発足は、1823年にウィリアム・ウェブ・エリスがラグビー校でフットボール（サッカー）の試合に参加したときに、ボールを腕に抱えて走ったことが、ラグビーの起源とされている。その後50年以上にわたって、ラグビーの試合を実施するためのルールが策定され、1870年までにラグビーフットボールユニオンが結成された。結成当初は、ロンドン、バース、ブラッドフォード、リバプール、ブライトンでプレーされていた。

イングランドのラグビーユニオンの運営団体であるラグビーフットボール協会（以下RFU）は、リーグの導入がアンフェアなプレーを増やし、選手とクラブ間で金銭要求などの衝突が起きることで、アマチュア精神に反するということを懸念し、長い間リーグ設立に反対していた。

リーグは、1987年に初めて導入された。リーグ開幕当初の参加クラブは、バース、ブリストル、コヴェントリー、グロスター、ハーレクインズ、レスター、モーズリー、ノッティンガム、オレル、セール、ワズプス、ウォータールーの12クラブで構成されていた。国内リーグの上位クラブは、観客動員数の増加、地元の後援者や全国規模の企業からの支援、定期的な試合を実施し選手たちの技術レベルは向上した。初期のシーズンでは、PRにホーム&アウェイの構造はなく、各クラブは1度だけの対戦を、毎週日曜日に実施していた。当初、バースとレスターの2つのクラブがPRで頭角を現し上位を独占していた。

2) ホーム&アウェイの導入

1994年、PRの試合形式に初めてホーム&アウェイを取り入れ、1994-95シーズンから、初めてSky Sportsで生中継され、BT Sportが独占権を獲得した。1996-97シーズンにPRはプロ化した。一部のクラブでは、裕福な後援者を集めることができたが、ウェストハートルプール、リッチモンド、ロンドンスコティッシュなどのクラブは、支援者が手を引き、経営が追い込まれ破綻した。1999年にはサラリーキャップを導入。サラリーキャップについては、常にリーグとクラブによって見直されてきた。2000-01シーズン開始とともに、シーズン構造の見直しが行われ、リーグ戦終了後に8クラブによるプレーオフ制度が導入されたが、レギュラーシーズン終了時に首位に立ったクラブは依然としてリーグの優勝クラブとみなされていた。2001-02シーズンの途中、レスターが4連覇を達成することが決定したが、8クラブによるプレーオフの勝者がリーグの優勝クラブとなることが決定された。この決定に対し、ファンからの反発がありこの提案は取り下げられた。2002-03シーズンから新しいプレーオフ形式が導入された。リーグ優勝クラブが2位・3位のクラブの勝者クラブと対戦することになった。これまでリーグ戦の勝者が優勝クラブとされてきた

が、プレーオフを導入して初めてプレーオフの勝者がリーグの優勝クラブとして認められた。

3) Premiership Rugby の米国進出

2013-14 年以降の欧州ラグビーチャンピオンズカップの将来が不透明な中、RFU は、アメリカへのブランド拡大に向けて動きを模索した。

2013 年 5 月、RFU とアメリカのリーグは 2014 年に開幕する予定であった、アメリカのプロリーグを支援する計画を立てた。計画の第一段階としてアメリカン・バーバリアンズのエキシビションを 2 試合実施する予定だった。アメリカン・バーバリアンズは 2013 年 8 月にアメリカとロンドンで試合を行う予定だったが、その計画は頓挫し、試合は無期限に延期された。2013 年 8 月、レスター・タイガースの会長ピーター・トムは、RFU がプレミアシップの一部の試合を米国で開催することについて議論した。米国で行われた最初の試合は、2016 年 3 月 12 日にニューヨーク大都市圏のレッドブルアリーナで、ロンドン・アイリッシュ対サラセンズだった。この試合は、ロンドン・アイリッシュがアメリカで毎年 1 試合ずつホームゲームを行うという 3 年契約の試合となる予定だったが、2015-16 シーズン後に、PR から降格したことでその計画は頓挫した。2017 年にアメリカのスポーツマーケティング会社 AEG と新しい契約が成立し、2017 年から 4 シーズンにわたって少なくとも PR の 1 試合がアメリカで行われる予定となった。この新しい契約下での試合は、2017 年 9 月 16 日に行われ、ニューカッスル・ファルコンズはサラセンズとのホーム戦をペンシルバニア州フィラデルフィア郊外のチェスターにある、スタジアムで行った。

2018 年と 2019 年はアメリカで試合が行われる予定はなかったものの、サラセンズ対ハリクインズの試合を開催した。アメリカで、PR の試合を初めてネットワークテレビ(NBC)が生放送した。

4) 名門クラブの破産

2022 年 10 月、PR 名門の 2 つのクラブが破産し、プレミアリーグは難しい局面を迎えていた。破産したロンドンワスプスは、1923 年～1996 年までロンドンのサドベリーにある、レプトンアベニューを本拠地としており、1996 年～2002 年まで、シェパーズブッシュのロフトスロードで、2002 年～2014 年まではバッキンガムシャーのハイウィコムのアダムズパークを本拠地としていた。2014 年～2022 年にかけて、彼らの本拠地はコヴェントリー北部のコヴェントリービルディング・ソサエティアリーナで、2023 年からは ARMCO アリーナでプレーする予定だった。2014 年に、クラブ名から「ロンドン」を外し、本拠地をロンドンからコヴェントリーに移転していた。

PR の強豪として、ハイネケン カップ 2 回、プレミアシップ 4 回のタイトル獲得を誇るワスプスが破産申請を提出し、選手とスタッフを含む 167 人の従業員が解雇された。ワスプスは、2016 年にも Wasps Netball を立ち上げ、スポーツ ブランドを拡大したが 2022 年 10 月 17 日に管理下に置かれ、すべての選手およびコーチング スタッフが解雇されていた。

元最高経営責任者のスティーブン・ヴォーンは、クラブが 1 億ポンド以上の負債を抱えていることを明らかにしていた。破産の原因がクラブの過失ではないこと証明できれば、クラブはこの決定に異議を申し立てることができるが難しい状況であった。ワスプスは、関税局から 200 万ポンドの未払いの税金と 2014 年のクラブ移転の資金となる 3,500 万ポンドの保証金の清算命令を受けていた。スタジアム建設費用は株式で資金を調達したが、経営が上手くいかず、株主に分配の支払いができなくなり最終的に破産した。

第 2 項 リーグ戦の開催方式

PR のシーズンは、ホーム&アウェイで対戦。リーグ戦では 24 試合が実施されており、12 試合がホームゲーム。リーグ戦後のプレーオフは上位 4 クラブによって争われ、1 位は 4 位と、2 位は 3 位とそれぞれ準決勝を行い、1 位と 2 位のクラブはホームアドバンテージを獲得できる。決勝まで進出すると計 26 試合が行われる。

リーグ戦の上位 6 クラブが翌シーズンの欧州ラグビーチャンピオンズカップへの出場権を獲得する。最下位に終わったクラブは下部リーグの RFU チャンピオンシップに降格し、次のシーズンには RFU チャンピオンズシップでプレーオフを勝ち抜いたクラブが昇格する。

第 3 項 試合日程

PR は 9 月～6 月まで 10 か月間開催されている。リーグ戦期間中に欧州ラグビーチャンピオンズカップが 1 月から 5 月にかけて実施されており、代表戦は 2 月 3 月に、6 Nations (欧州 6 ケ国対抗戦)、6 月と 11 月にテストマッチが実施されている。

表 2 イギリスの年間スケジュールと試合数；PR 公式 HP 等より筆者作成

		試合数(最大)		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
英	リーグ	24(+2)	46												
	欧州	9													
	代表	11													

PR のレギュラーシーズンが開催される 24 回の週末のうち、4 週のみ金曜のナイターゲームを実施していなかった。開催されなかった日は、12 月 25 日、1 月 1 日、3 月 11 日、最終戦の 4 回のみであった。金曜日ナイター全試合の平均来場者数は 13,124 人と人気が高かった。キックオフ時間は、156 試合中 109 試合が 15 時から実施されていた。イギリスでは、土曜日に、各地域のクラブラグビーの試合があり、日曜日にはキッズのラグビーの試合が開催されていた。

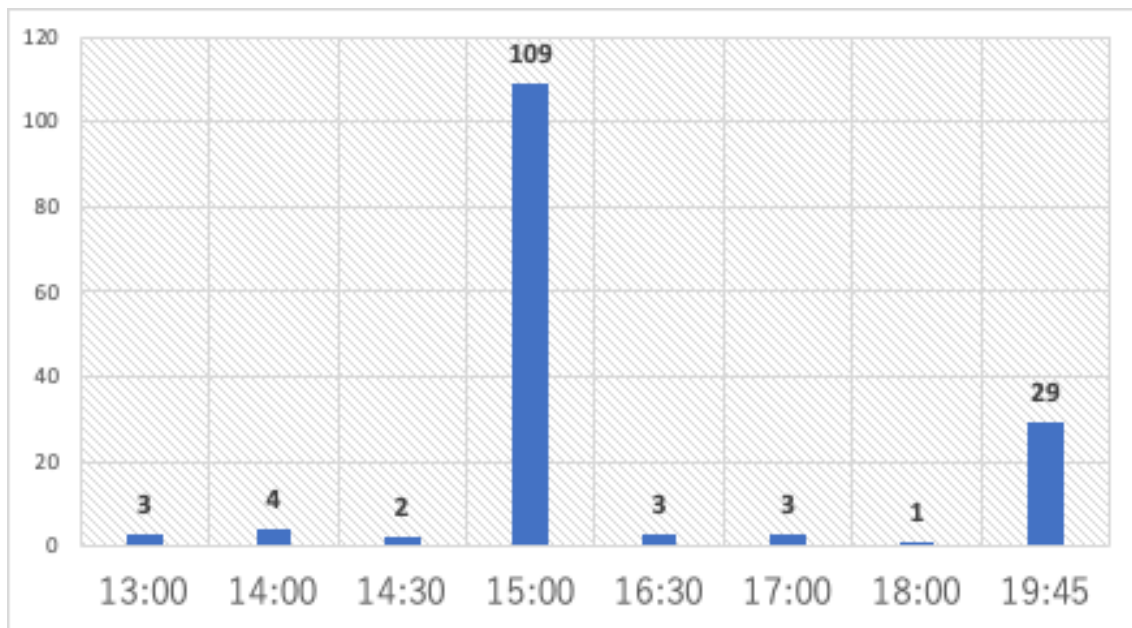


図1 PRのキックオフ時間(2021-2022)；PR公式データより筆者作成

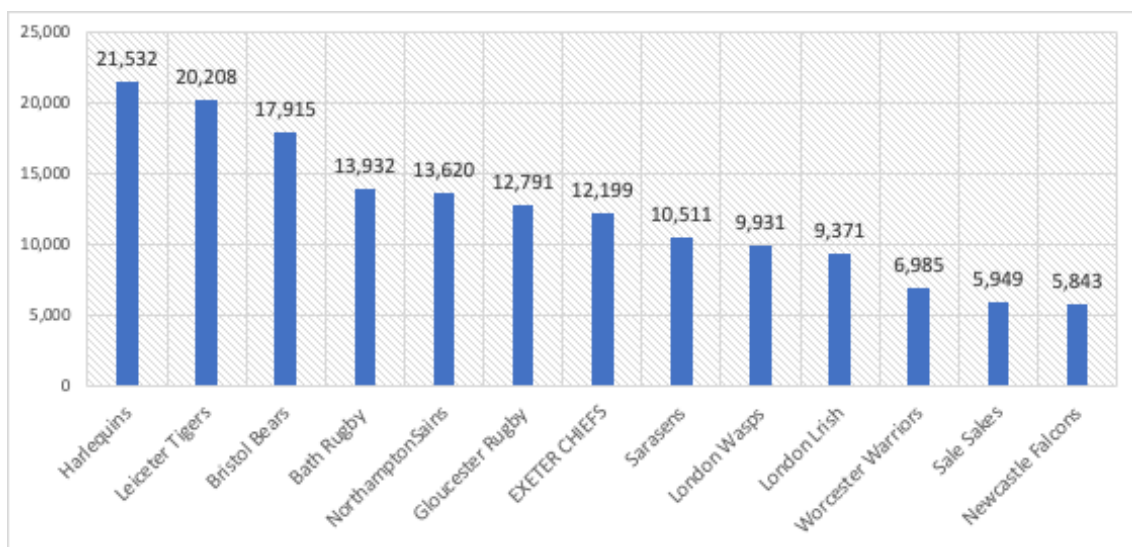


図2 PRのクラブ別平均入場者数(2021-2022)；PR公式データより筆者作成

第4項 クラブの分布

PRは13クラブによって構成されている。13クラブが英国全土に拠点があり、首都ロンドンには3クラブが本拠地を構える形となっている。※2021-22シーズン

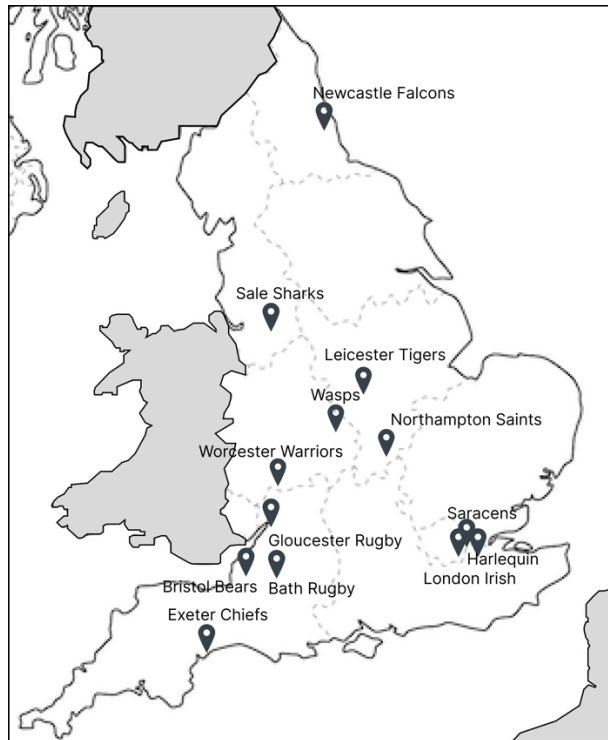


図3 PRのクラブ分布；PR公式サイトより筆者作成

第5項 スタジアム

PRのスタジアム収容人数は8500～32,609で13クラブ中10クラブが収容人数20,000人未満のスタジアムを使用していた。ラグビー専用スタジアムは8ヶ所であった。5ヶ所は他競技と共有し使用されていた。毎年、決勝戦はラグビーの聖地と言われる82,000人収容可能な、トウイッケナム・スタジアムなどを使用していた。

表3 PRのスタジアム一覧；各スタジアム情報より筆者作成

Stadium	Capacity	Location	Rugby Union Tenants	Other Tenants
Coventry Building Society Arena	32,609	Coventry	Wasps	Coventry City
Ashton Gate	27,000	Bristol	Bristol	Bristol City
Welford Road	25,849	Leicester	Leicester Tigers	
Brentford Community Stadium	17,250	London	London Irish	Brentford
Kingsholm Stadium	16,115	Gloucester	Gloucester	
Franklin's Gardens	15,249	Northampton	Northampton Saints	
Twickenham Stoop	14,816	London	Harlequins	
Recreation Ground	14,500	Bath	Bath	
Sandy Park	13,800	Exeter	Exeter Chiefs	
Sixways Stadium	12,024	Worcester	Worcester Warriors	
AJ Bell Stadium	12,000	Salford	Sale Sharks	Salford Red Devils
Kingston Park	10,200	Newcastle	Newcastle Falcons	Newcastle Thunder
StoneX Stadium	8,500	London	Saracens	

第6項 放映権

PR はリーグが放映権を一括管理し、マーケティング活動はクラブが主導でありスポンサー収入が主たる収入源となっていた。放映権は 2020 年 12 月 18 日に締結された新契約に基づき、現在 BT Sport が一次権利を保有している。2023-24 シーズンの終わりまでに 1 シーズン最大 80 試合ライブ放送するとともに、すべての試合のハイライトなども放送している。イギリスの二次権利は ITV によって保持されていて、決勝戦を含む 7 試合の無料放送で流している。BT Sport とは別のプレゼンターと解説をアサインさせ、2023-24 年のシーズン終了まで毎週ハイライト番組も放映していた。

PR の 2021-22 シーズンの海外への放映は 145 の異なる地域で 1 億 5,800 万世帯を超えていた。

表 4 Premiership Rugby が放映されている国・地域；PR 公式 HP より引用

国・地域	放送局
フランス	Sportall
イタリア	Mola TV
スペイン	Telefonica/Moviestar
オランダ	Ziggo
チェコ、スロヴァキア	Nova
マルタ	Go TV
エストニア、ラトビア、リトアニア	NENT
アメリカ	NBC Peacock
カナダ	Rogers Sportnet
ラテンアメリカ(ブラジルを含む)およびカリブ海諸国	ESPN Sur
オーストラリア	Stan
ニュージーランド	SKY New Zealand
日本	Sports Partners
中東諸国(サウジアラビア除く)	Premier Sports
アジア諸国(バングラデシュ、ブータン、ブルネイ、カンボジア、香港、インド、インドネシア、ラオス、マカオ、マレーシア、モルディブ、モンゴル、ミャンマー、ネパール、パキスタン、フィリピン、シンガポール、韓国、スリランカ、台湾、タイ、ベトナム)	Premier Sports
アフリカ諸国(アンゴラ、ベナン、ボツワナ、ブルキナファソ、ブルンジ、カメルーン、カーボベルデ、中央アフリカ共和国、チャド、コモロ、コンゴ、コンゴ民主共和国、ジブチ、赤道ギニア、エリトリア、エチオピア、ガボン、ガンビア、ガーナ、ギニア、ギニアビサウ、コートジボワール、ケニア、レソト、リベリア、マダガスカル、マラウイ、マリ、モーリタニア、モーリシャス、マヨット、モザンビーク、ナミビア、ニジェール、ナイジェリア、レユニオン、ルワンダ、サントメ&プリンシペ、セネガル、シエラレオネ、ソマリア、南アフリカ、南スーダン、スーダン、スワジランド、タンザニア、トーゴ、ウガンダ、ザンビア、ジンバブエ)	Supersport

第7項 サラリーキャップ

1) ホームグロウンプレイヤークレジット

PR では、プレミアシップ・ラグビー委員会が設定するサラリーキャップが運用されており、クラブが1シーズンあたりクラブの選手給与に費やせる金額が規定されている。「ホームグロウンプレイヤークレジット」が60万ポンド（1億円）までと設定されている。ホームグロウンプレイヤークレジットとは、地元で育った才能を維持するようクラブに奨励することを目的にされたシステムである。

表5 PR各クラブのホームグロウンプレイヤーの比率

「Premiership squads and homegrown percentages for 2019/20」より筆者作成

Club	Squad size	Academy graduates	% of squad homegrown
Bath	63 (-3)	39	47.6% (+6.7%)
Bristol Bears	52 (-12)	21	25% (+0%)
Exeter Chiefs	60 (-6)	34	48.3% (+1.3%)
Gloucester	60 (+2)	46	53.3% (+8.5%)
Harlequins	60 (-1)	38	50% (-4.1%)
Leicester Tigers	62 (+5)	50	56.5% (+7.4%)
London Irish	51	34	39.20%
Northampton Saints	56 (+3)	37	50% (+2.8%)
Sale Sharks	54 (+3)	36	55.6% (-1.8%)
Saracens	57 (-4)	48	57.9% (+0.5%)
Wasps	64 (+6)	32	31.3% (+2%)
Worcester Warriors	57 (-4)	25	36.8% (+2.4%)

2) サラリーキャップの見直し

PR では、新型コロナウイルスの影響を受け 2020 年に大幅にサラリーキャップを見直すことが、選手会、リーグ間で審議され全会一致で承認された。PR では、2024-25 には現状に戻す予定ではあるものの 2021-22 シーズンから 2 シーズン、サラリーキャップをクラブ全体の年俸総額が £6,400,000(10 億 2400 万円)であったものが、£5,000,000(8 億円)へと引き下げる方針であると表明した。

サラリーキャップには厳格なルールが定められている。違反した場合には大きな制裁が待ち受けている。罰金と、下部リーグへの降格、タイトルや賞金の返還命令が下される。最も重い制裁にはクラブの勝ち点よりマイナス 50 ポイント、£600,000(約 1 億円)の罰金となる。制裁を受けた事例は PR の名門サラセンズによって引き起こされた過去がある。当時£7,000,000 (約 11.2 億円) のサラリーキャップに違反し、35 点の減点と£5,300,000 (約 7.4 億円) の制裁を受け下部リーグへ降格となった。

リーグは、クラブを公平に審査するために第三者組織として、サラリーキャップディレクターを設けている。サラリーキャップディレクターは、クラブや選手を問わず、全ての契約毎に調査することが可能となっている。このことによりクラブとの契約以外も厳格に管理し公平性を保っている。

優勝クラブには延長監査が与えられ、クラブ関係者の電子メールとテキスト/what's app などのメッセージや、選手の少なくとも 50%の納税申告書と銀行取引明細書などを確認・提出する義務などがクラブには発生する。

表 6 サラリーキャップの制裁；SALARY CAP YEAR 2021-22 より筆者作成

Level of breach (£)	Points deduction
0 - 99,999.99	0
100,000 - 199,999.99	0
200,000 - 399,999.99	15
400,000 - 599,999.99	35
600,000 and over	50

3) サラリーキャップの除外項目

PR では、サラリーキャップで規制されている選手の給与上限総額に、Marquee player の給与は反映されない仕組みとなっている。このことにより各クラブは、国内の有望選手を国内にとどめることや、海外から新たな戦力を獲得していた。このシステムは、クラブやリーグにとっては重要なシステムとして利用されてきた過去を持つが、1 クラブ 2 名が 2022-2023 年より 1 名へ変更になったことはリーグやクラブには大きな影響を及ぼす。変更前に除外選手を 2 人抱えているクラブは例外となり、最初の契約が切れるまでは、サラリーキャップより除外されたままとなっている。

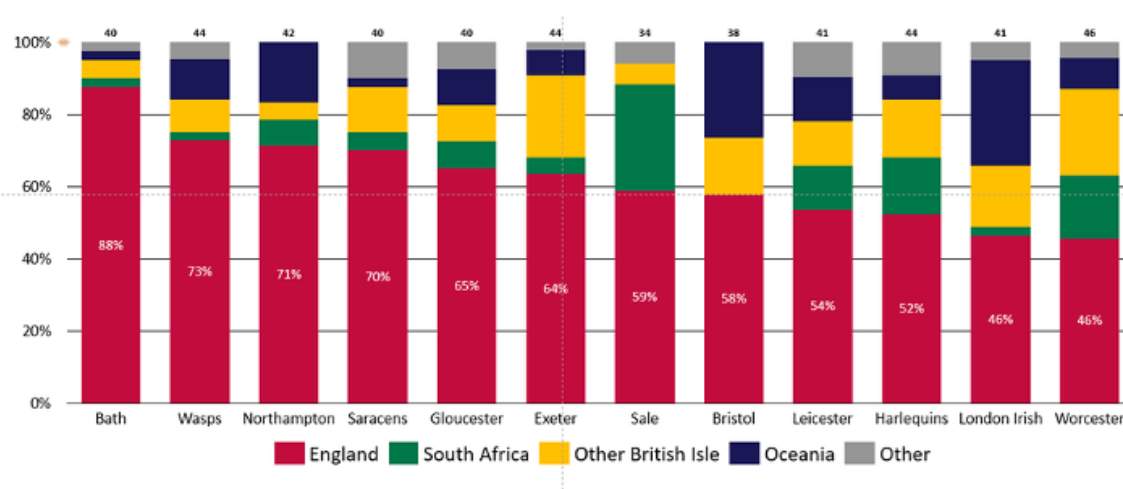


図4 PR各クラブのイングランド人選手の割合

引用元：Rugby Union news, analysis and opinions

4)PRの外国人選手について

PR では南アフリカ、サモア、フィジー、トンガ等の英連邦諸国や EU 加盟国の選手は外国人選手とみなされていなかった。2017-18 シーズン P R のイギリス出身者以外の選手は London Irish が最も多く 62%となっていた。最も少ないクラブは Wasps で 24%となっていた。

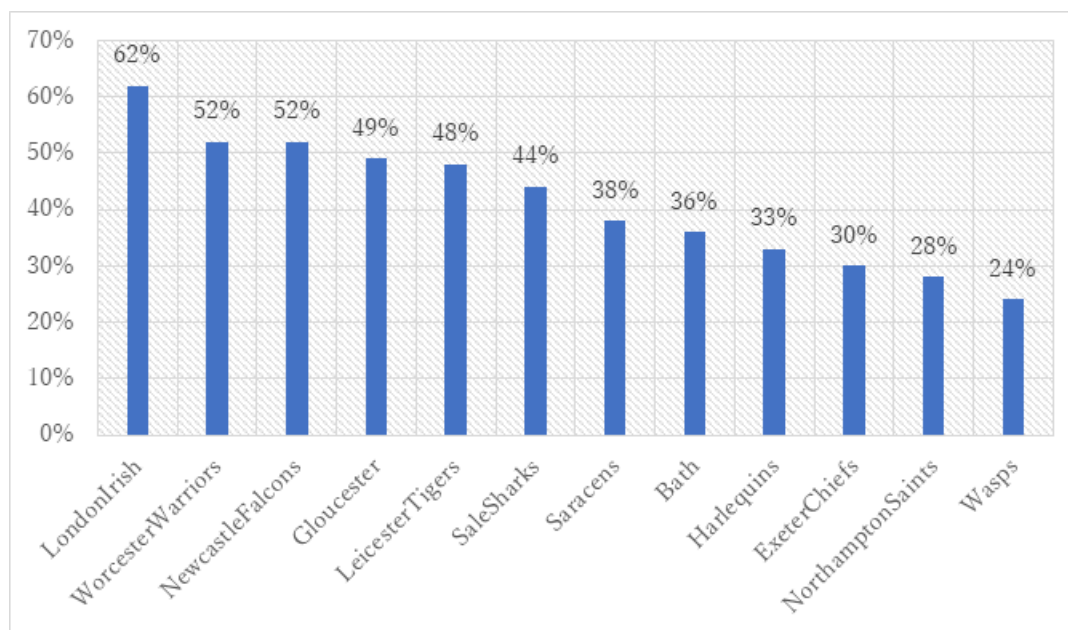


図5 PR各クラブのイングランド以外の出身者比率(2017-18シーズン)

Study Reveals Premiership Club Has Highest % of Players from Overseas in Europe's Top Leagues より筆者作成

第8項 試合出場のルール

PR、欧州チャンピオンシップ、代表戦など(年間 46 試合)試合数が多いことによる選手の怪我のリスクなど考慮し、より安全な環境で選手生活を送るため、The Rugby Football Union (RFU)・Rugby Player Association(選手会)・PR で協議を行い、以下のようにルールを決定していた。

表7 代表戦に出場した場合のルール

原文	• Guaranteed in-season breaks for players in each of the three seasons. • Mandatory five-week post-season rest for all players which includes two weeks' absolute rest and three weeks' active rest • Minimum 10 weeks off/pre-season for England Senior Elite Player Squad (EPS) players (five weeks rest and five weeks preparation) • Minimum 12 weeks between Gallagher Premiership Rugby Final and Round 1 of the following Gallagher Premiership Rugby season • Maximum 35 match involvements (>20 minutes) in any one season for all players • Maximum 30 full game equivalents (reduced from 32) in any one season for all players • Premiership Rugby Cup structure to provide rest weeks for players with the most match time • England Senior EPS players to have a mandatory rest week if playing all international matches and more than 65% of total minutes (reduced from 80%) in the Quilter Internationals or Six Nations
----	--

	・ England Rugby World Cup squad rested for the summer Tests in July 2020 unless they have had 20 or fewer match involvements in the 2019-20 season ・ England players on the 2021 British and Irish Lions tour to have a rest week during the 2021 Autumn internationals ・ English Lions' players to have 10 weeks break ・ Tri-partite panel with an independent chairman to monitor and ensure compliance with the principles and to decide on any individual exceptions
翻訳	・ 3 シーズン各選手のシーズン中の休憩を保証する。 ・ シーズン後の 5 週間の休息(2 週間の絶対休息と 3 週間のアクティブ休息を含む)を全選手に義務付ける ・ イングランドシニアエリート選手団(EPS)選手の最低 10 週間のオフ/プレシーズン(5 週間の休息と 5 週間の準備) ・ ギャラガー・プレミアシップ・ラグビー決勝から次のギャラガー・プレミアシップ・ラグビーシーズン第 1 ラウンドまでの間に最低 12 週間 ・ 全選手の 1 シーズン最大 35 試合(20 分以上の出場時間を対象) ・ 全プレイヤーの 1 シーズンの出場試合数は最大 30 試合相当まで(32 試合から減少) ・ プレミアシップラグビーカップの出場選手の中で試合時間が最も多い選手に休息週を提供する ・ イングランドシニア EPS 選手は、すべての国際試合をプレーする場合、休息週を持つことを必須とし、インターナショナルまたはシックス・ネーションズでは合計時間の 65%以上(80%から減少)を対象とする。 ・ ラグビーワールドカップイングランド代表は、2019-20 シーズンの出場試合数が 20 試合以下の場合を除き、2020 年 7 月のサマーテストに向けて休息を取ること ・ 2021 年ブリティッシュ・アンド・アイリッシュ・ライオンズ遠征のイングランド選手は、2021 年秋季国際大会期間中を休息週とする。 ・ イングリッシュ・ライオンズの選手は 10 週間の休暇を取る ・ 独立委員長による第三者パネルにより、原則の遵守を監視・確保し、個々の例外を決定する

第9項 トウイッケナム・スタジアム

イギリスは、サッカー・ラグビーの発祥の地とされている。ウェンブリー・スタジアムがサッカーの聖地と称されているのに対して、ラグビーの聖地と称されるのがトウイッケナム・スタジアムである。

トウイッケナム・スタジアム収容人数は 82,000 で、76 室のスイートルームと 4,400 席の特別席が設けられており、イングランド代表のホームスタジアムとされている。RWC1991・RWC2015 のでも使用された他、7's ワールドシリーズロンドン大会や、オックスフォード大学とケンブリッジ大学によるヴァーシティマッチ、国内リーグ(PR)も開催される。スタジアム内には、イングランドラグビー協会やワールドラグビー博物館がおか

れている。ラグビー以外では 2016 年に NFL や、毎年世界的に著名なアーティストのコンサート等も実施していた。

スタジアム内には London Marriott Hotel Twickenham が入っており、ピッチ内が一望できる部屋や、イベントスペースや会議室等も併設されている。プールやサウナ、ジム等の設備も整っていた。試合当日には、ホスピタリティーチケットとして、有名シェフが作った料理を食べながらロイヤルシートやボックスに座れ、現役選手やメンバー外の選手、レジェンドなどとコミュニケーションが取れるイベントなどが用意されていた。

ラグビーシーズンではない夏には、ピッチにて BBQ パーティやウエディングパーティー等も行われている。その際、スタジアムツアーにて選手が使っているロッカールーム等で写真が取れるなどのオプションも確認できた。

第 10 項 RWC

1991 年に欧州連合(イギリス・フランス・スコットランド・アイルランド・ウェールズ)での開催。2015 年には単独で RWC2015 を開催した過去を持つ。RWC2015 イングランド大会では 48 試合が開催され、総入場者数 2,477,805 人、1 試合平均 51,621 人と RWC 歴代最多の入場者数となった大会であった。

イギリス国内 12 会場とウェールズ・カーディフのミレニアムスタジアムを加えた 13 会場で開催し、全ての会場の収容割合の平均が 95.27%となっていた。最も収容率が高かったスタジアムは 9 万人が収容できるウェンブリー・スタジアムで 89,019 人のファンがニュージーランド対アルゼンチンを観戦した。ラグビーワールドカップ史上で最多の観衆となった。放映権については、ITV が 2011 年 2015 年の放映権を獲得していたため、イギリス国内では全ての試合を放送していた。

2014 年 9 月に開始された大会チケット価格は、プール戦 15 ポンド(¥2,400)から販売しており、子供のチケットは 48 試合中 41 試合で 7 ポンド(¥1,120)から利用されていた。決勝戦のチケットは 15 ポンド (¥24,000) から 715 ポンド (¥120,000) であった。

第 2 節 BRISTOL SPORTS の取り組み

BRISTOL SPORTS はホールディングスという形で、サッカー、ラグビー、バスケットボールの運営業務を行い、3 競技の異なるスポンサー企業との調整を行いながら、アシュトンゲートスタジアムを活用し収益化を図っていた。

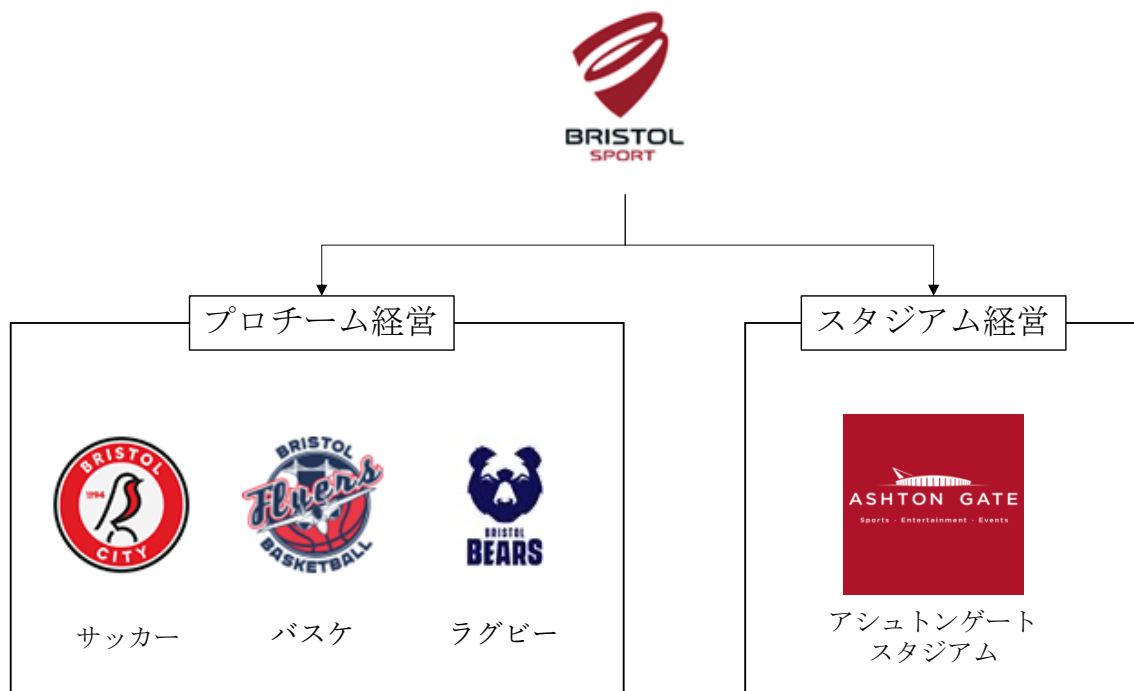


図6 BRISTOL SPORTS の事業体制；インタビュー結果より筆者作成

8月から翌年5月にかけて、サッカーが25試合、ラグビーが12試合、年間のスタジアム使用数は37回公式戦が行われていた。

試合が実施されていない平日などは、スタジアムのレセプションルームやコンコース等のスペースを企業や団体へ貸し出すなど有効活用し、街のコンベンションセンターとしての役割も果たしていた。試合が行われない週末には、コンサートやイベント開催など興行試合時以外の取り組みも積極的に行っていた。

8月9日 ●	11月24日 ●	2月11日 ●	● = Rugby ● = Soccer
8月20日 ●	11月26日 ●	2月19日 ●	
9月11日 ●	12月4日 ●	2月22日 ●	
9月15日 ●	12月18日 ●	3月5日 ●	
9月17日 ●	12月26日 ●	2月25日 ●	
9月25日 ●	12月30日 ●	3月13日 ●	
10月1日 ●	1月2日 ●	3月19日 ●	
10月16日 ●	1月7日 ●	4月9日 ●	
10月19日 ●	1月8日 ●	4月18日 ●	
10月30日 ●	1月22日 ●	4月22日 ●	
11月6日 ●	2月5日 ●	4月30日 ●	
11月20日 ●	2月9日 ●	5月20日 ●	

図7 ブリストルスポーツのスケジュール；ブリストルスポーツ公式HPより筆者作成

1) 顧客データベース

BRISTOL SPORTS では、限られた施設、顧客データを集約することで効率化を図っていた。各競技が独自のチケットティングシステムやHPなどを構えず、Bristol SportsとしてHPを構え、チケットティングシステムではホールディングスの強みをいかし、集約されたデータベースに基づき限られた顧客データへアプローチできるシステムを運用していた。

顧客データベースを作ること、性別や年齢、来場履歴やグッズの購入履歴などあらゆる情報を集約。ラグビー（ブリストルベアーズ）とサッカー（ブリストルシティ）は同じチケットシステムを共有し使用していた。チケット購入方法は、現在インターネットからは約70%の利用者が購入。今後100%にしデジタル戦略を実施しようと考えていた。ブリストル・ベアーズは、シーズンチケットホルダー約10,000名。スタジアムのキャパ(約27,000名)と平均集客数を踏まえると、まだキャパに余裕があるが、隣の地域のクラブ Bath Rugby Club は、スタジアムのキャパ13,000名、毎試合いっぱいになることから、これ以上観客動員数を伸ばせないため、ブリストルは他のクラブとは別の戦略を立て独自に動いていた。2017-2018シーズンに Pat Lam 氏が就任後、シーズンシートホルダーは約2倍に増え、PRで2番目となっていた。

ブリストル・ベアーズは、デジタル戦略に力を入れており、動画や写真などライト層へのアプローチなど、アメリカのプロスポーツを参考にしていた。興行試合では、音楽イベントやファンのエンゲージメントを高める様々なアクションを実施していた。レプリカジャージの売上は、毎年飛躍的に伸びており、普段でも着用してもらえるようにデザイン性を工夫、デザインやカラーは毎年変えていた。地域貢献、地域との関係作りについては日々の取組みが重要であり、選手全員が病院や学校に訪問していた。様々なキャンペーンにも積極的に参加していた。日ごろから地域やファンと関係を作っていると、たとえ試合

に負けたとしても、ファンはストレスが溜まるかもしれないが、怒ることはなく、クラブが成長する道のりだと思ってもらえらとを考えていた。ブリストル・ベアーズは、ただのラグビーのクラブではなく、ブリストルでラグビーのサービスを行っているクラブ。地域の象徴的な存在になれるように、レガシーを残していけるように、ビジネスでのネットワーク構築できるようにしていた。

サラリーキャップが変化する中、どうやって有望選手を獲得できるか、クラブに残ってもらえるか、創造力をもってやっていかないといけないと考えていた。アカデミーの運営で、若い選手がもっとラグビーができる環境づくりや、地元の大学との関係作りなどは地元選手の発掘・育成に繋がる。選手のプロモーションへの協力も力を入れていた。試合のノンメンバーは、子ども向けアクティビティやショップの販売、スポンサーへのホスピタリティの対応など協力していた。

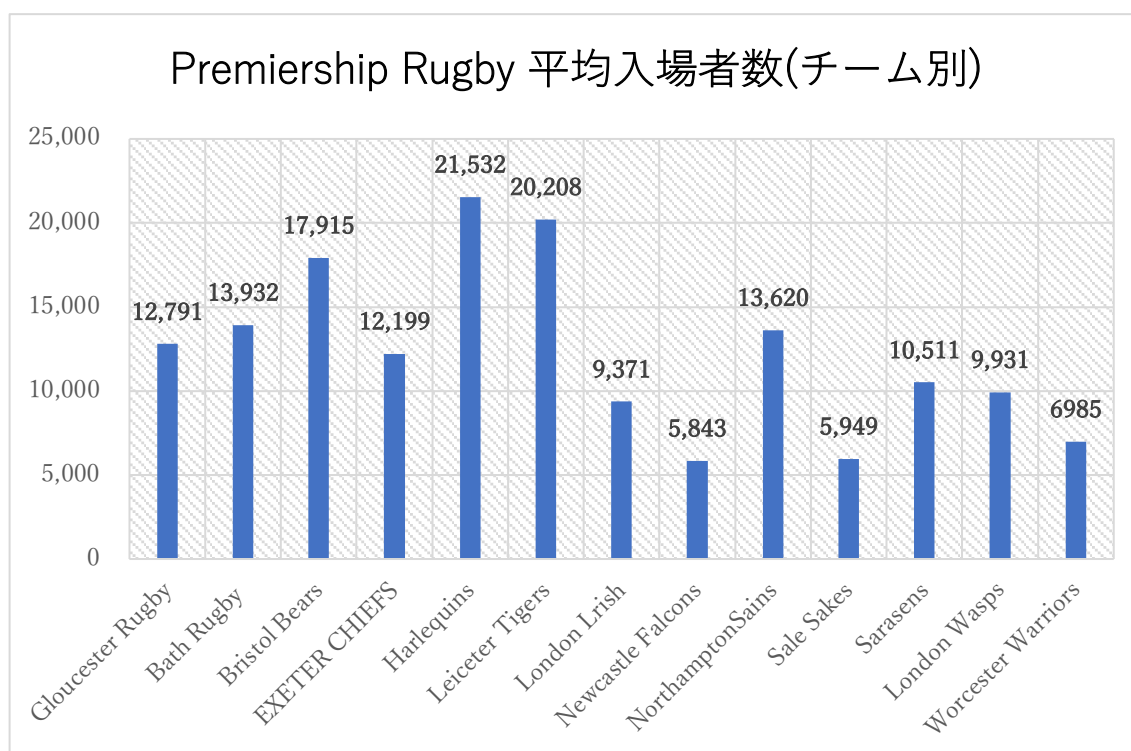


図8 PR チーム別平均入場者数(2021-2022)；公式データより筆者作成

2) アシュトンゲートスタジアム

施設内には、スポーツバーやジム、レストランなど市民が日常的に使用可能な施設も完備されている。現在、サッカーとラグビーがフィールドを使用した興行を行っているが、近い将来、バスケットの施設やホテルなども併設した複合施設を、スタジアム敷地内に増築する形で建設を目指していた。



図 9 アシュトンゲートスタジアム；Bristol Sports 公式 HP より引用



図 10 アシュトンゲートスタジアム；Bristol Sports 公式 HP より引用

第3節 TOP14

第1項 歴史

フランスの TOP14 は 1892 年に創設され、パリを拠点とする Stade Français と Racing Club の 2 クラブによって試合が行われた。以来、第一次世界大戦のあった 1915 年～1919 年までと、第二次世界大戦のあった、1940 年～1942 年までを除き、毎年開催されている。優勝クラブには、1892 年から授与されているトロフィー-Bouclier de Brennus が贈られている。Toulouse(トゥールーズ)は、TOP14 で 21 回の優勝を誇る最多のクラブであり、1994 年の優勝を含め 4 連覇を達成した。

それまではアマチュアだったリーグは、1995 年に南アフリカで開催されたラグビーワールドカップをきっかけにプロ化された。それ以降、TOP14 の人気が高まり観客動員数・収益が増加した。スタッド・トゥールーザン、クレルモン・オーヴェルニュ、ラシン・メトロ 92 などの資金力のあるクラブを中心に所属選手への報酬も増加し、海外の代表クラスの選手が多くプレーするようになった。2010-11 シーズンからは、報酬額の過度の増加を抑えるためにサラリーキャップ制が導入された。

第2項 リーグ戦の開催方式

TOP14 は、14 クラブによって構成されており、ホーム&アウェイを導入している。リーグ戦では 26 試合が実施されており、13 試合がホームゲームである。リーグ戦後のプレーオフには、上位 6 クラブがノックアウト方式のトーナメントに進み、準々決勝は 3 位が 6 位と、4 位が 5 位と対戦し、1 位 2 位のクラブは準決勝に自動的に進出する。リーグ戦下位 2 クラブはプロ D2 (2 部リーグ) に降格する。

同リーグは、フランス国内最高峰リーグの優勝を決める大会と同時に、欧州チャンピオンズカップをかけた戦いでもある。トップ 14 の上位 6 クラブが翌シーズンの欧州チャンピオンズカップの出場権を獲得できる。

第1項 試合日程

TOP14 は通常 9 月～6 月まで 10 か月間開催されている。リーグ戦期間中に欧州ラグビーチャンピオンズカップが 1 月から 5 月にかけて実施されており、代表戦は 2 月 3 月に、6 Nations (欧州 6 ケ国対抗戦)7 月と 10 月にテストマッチが実施されていた。

表 8 フランスの年間スケジュールと試合数；TOP14HP 等より筆者作成

		試合数(最大)	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
仏	リーグ	26(+3)												
	欧州	9												
	代表	11												

第2項 クラブの分布

TOP14 は、パリに2クラブとフランス南部に12クラブで構成されている。フランス国内ではサッカー(リーグ・アン)ラグビー(TOP14)の本拠地は、サッカークラブは北部を中心に本拠地を構え、ラグビーは南部に本拠地を構えている傾向にあった。



図11 TOP14のクラブ分布 筆者作成

第3項 スタジアム

TOP14 の平均観客数は13,881人(2018-2019シーズン)で、収容人数は12,500人～33,500人であった。ラグビー専用スタジアムは12ヶ所であった。注目カードや、伝統の一戦などは多くのファンが収容可能なスタジアムを使用していた。決勝戦は毎年ナショナルスタジアムである、Stade de Franceを使用していた。

表9 TOP14のスタジアム；RAPPORT DNACGより筆者作成

Teams	設立年	本拠地	Stadium	収容人数
Bordeaux	1896	Bordeaux (Gironde)	Stade Chaban-Delmas	33,500
Racing	2006	Nanterre (Hauts-de-Seine)	Paris La Défense Arena	30,681
Lyon	1882	Lyon (Métropole de Lyon)	Matmut Stadium de Gerland	25,000
Stade Français	1883	Paris, 16th arrondissement	Stade Jean-Bouin	20,000
Clermont	1807	Clermont-Ferrand(Puy-de-Dôme)	Parc des Sports Marcel Michelin	19,022
Toulouse	1911	Toulouse (Haute-Garonne)	Stade Ernest-Wallon	18,784
Pau	1908	Pau (Pyrénées-Atlantiques)	Stade du Hameau	18,324
Toulon	1898	Toulon (Var)	Stade Mayol	18,200
La Rochelle	1986	La Rochelle(Charente-Maritime)	Stade Marcel-Deflandre	16,000
Montpellier	1910	Montpellier(Hérault)	Altrad Stadium	15,697
Biarritz	1933	Biarritz (Pyrénées-Atlantiques)	Parc des Sports Aguiléra	15,000
Perpignan	1902	Perpignan(Pyrénées-Orientales)	Stade Aimé Giral	14,593
Brive	1904	Brive-la-Gaillarde(Corrèze)	Stade Amédée-Domenech	13,979
Castres	1906	Castres (Tarn)	Stade Pierre-Fabre	12,500

第4項 観客動員数

2005-06 シーズン、トップ 14 の人気は急上昇し、観客動員数は 2004-05 シーズンから 25% 増となり多くの試合でチケットが売り切れとなった。2005 年 10 月 15 日、スタッド・フランスはトゥールーズとのホームゲームをナショナルスタジアムで、79,502 人の観客を集め、スポーツのレギュラーシーズンにおけるフランスの観客動員数記録を 2 万人以上塗り替えた。この記録は、2006 年 3 月 4 日、スタッド・フランスがビアリッツとの決勝戦に 79,474 人を集め、破られた。2006 年 10 月 14 日、同じ相手との対戦で 79,619 人を集めて再び記録を更新。2007 年 1 月 27 日、スタッド・フランス対トゥールーズの試合でも 79,741 人を集めて 4 度目の更新となった。2010-2011 年のレギュラーシーズンでは、1 試合あたりの平均観客数は 14,184 人に達している。2016 年に開催された TOP14 決勝戦はスペインのバルセロナで行われた試合で過去最高の 99,124 人を記録した過去した。

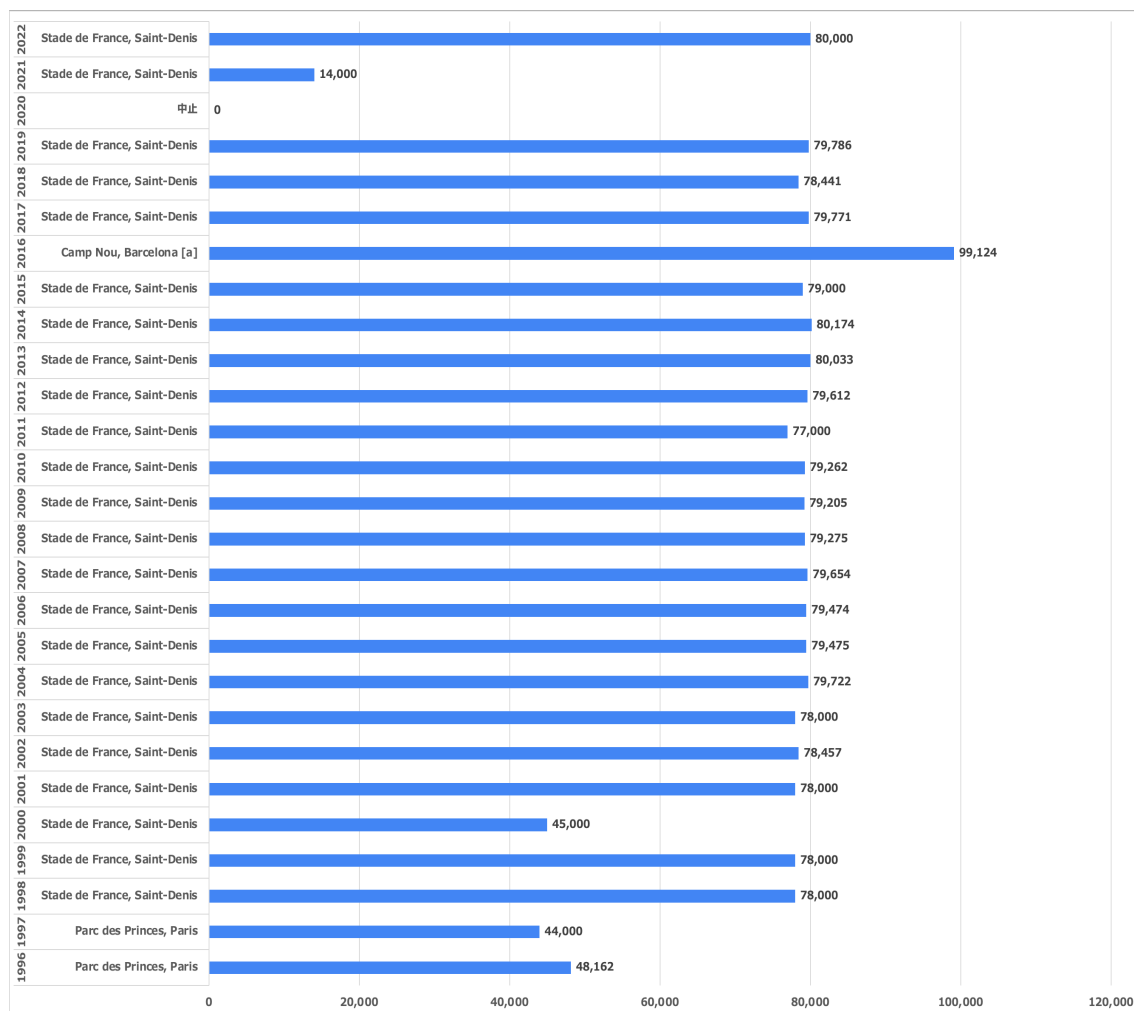


図 12 TOP14 の決勝戦の観客動員数(1996-2022) ; TOP14 公式 HP よりより筆者作成

第5項 放映権

TOP14 の放映権については、2008-09 シーズン以降、レギュラーシーズン、プレーオフ準々決勝、プレーオフ準決勝は、Canal+が放映していた。2008-09 シーズンから 2010-11 シーズンまでは、France Télévisions がプレーオフ決勝を放映していたが、2011-12 シーズンからは Canal+と共同でプレーオフ決勝を放映していた。フランスの有料テレビ局 Canal+ は、2023/2024 シーズンから 2026/27 シーズン終了までの4年間で、約4億5,440万ユーロ(636億1600万)で、トップ14のラグビーユニオン大会の国内放映権を獲得している。平均して年間約1億1,360万ユーロ(159億400万)に及び、既存の契約より17%増加している。Canal+はプレーオフと、決勝戦を含むトップ14のすべての試合と、フランスのトップ14に特化した番組を独占的にカバーすることやデジタルプラットフォームを活用した、ハイライト動画などの使用が可能となった。2020-21 シーズンの決勝は390万人が決勝戦を視聴し、2021-2022 シーズンの決勝は322万人(18.1%)が視聴していた。

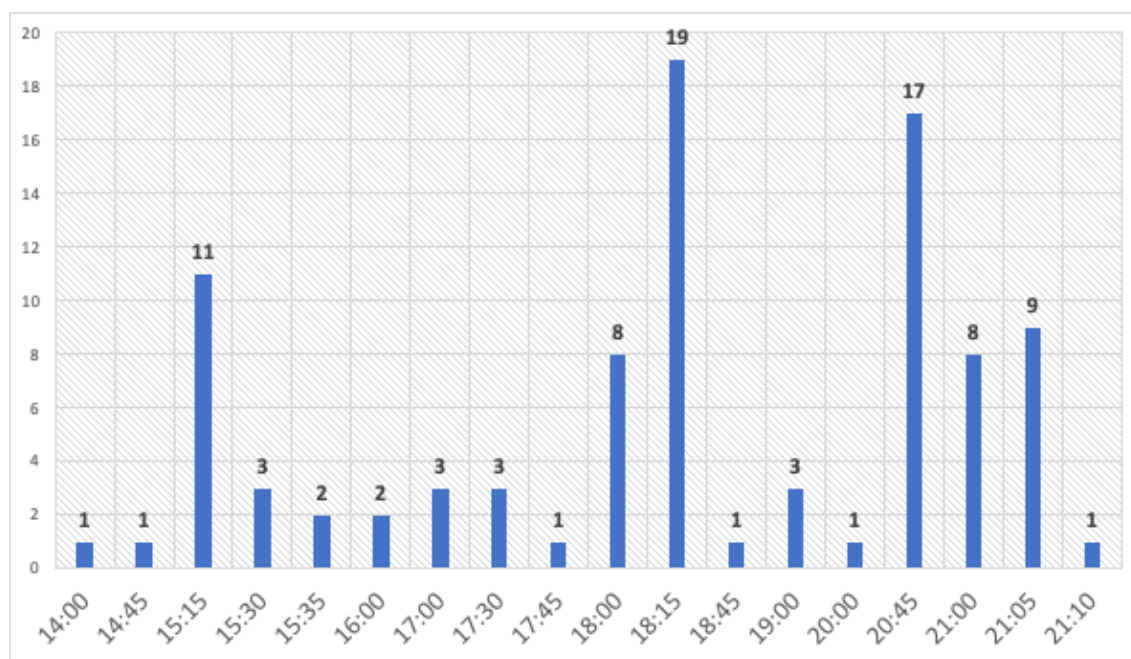


図13 TOP14のキックオフ時間(2020-2021)公式データより筆者作成

第6項 サラリーキャップ

クラブの支出増加を抑制するため、2010-11 シーズンからトップ14でサラリーキャップを導入した。これは、クラブの売上高の50%以下という従来の規定に加えて、800万ユーロという上限が設定された。2011-2012年シーズン、サラリーキャップの上限を870万ユーロに引き上げた。その後、上限はさらに上昇し2013-14年から2015-16年まで1000万ユーロとなった。

2019-2020 シーズンに Covid-19 パンデミックの影響を受けた TOP14 は、2010 年に導入したサラリーキャップの見直しをおこなった。これまで引き上げ続けられた 1130 万ユーロ (15 億 8200 万) であった上限額を、2021 年シーズン開始時期には 994 万ユーロ (13 億 9160 万) と決定している。LNR の報告書によると、サラリーキャップを下げたことにより選手の給与が大きく変化したことが確認できた。

第7項 外国人制度

TOP14 では外国人枠の人数設定がないものの、クラブの選手登録名簿にフランス人選手の割合を明記する新しいルールも発表した。このルールは、23 歳になる前に少なくとも 5 年間 FFR に登録しているか、21 歳になる前に FFR の認可を受けたトレーニングセンターで 3 シーズンを過ごしていなければならない。当初、2010-11 シーズンに JIFF50% を要求する予定だったが、有力クラブから抗議があり同シーズンは 40% へと定めた。当初は 2011-12 年に 50%、2012-13 年に 60% の枠を満たす予定だったが、クラブとの反対により 2013-14 年まで枠に変更はなく、その後 55% にまで増加された。つまりスコッドも含めたクラブの登録選手に要件を満たした選手が 55% 含まれていなければならないということである。その要件を満たせば外国人を何名でも登録することはできる。

クレルモンとトゥーロンは、ハイネケンカップ準決勝で、30 人中 8 人のフランス代表資格を持つスターティングメンバーを起用した。この 8 人のうち、フランス代表のレギュラーだったのは 4 人だけだった。

2012-13 シーズンでは、リーグ得点王トップ 3 のうちフランス人はおらず、トライ王トップ 10 のうちフランス人は 3 人だけだった。また、そのシーズンに各ポジションで最も活躍した 15 選手 (BEST15) のうち、フランス人は 3 人しかいなかった。トップ 14 に採用された外国人選手の数、2011-12 シーズンの 61 人から 2014-15 シーズンの 34 人に減少したが、クラブはすぐに規則を回避する方法を見出した。多くのクラブがスカウトを派遣し、10 代の有望選手を海外から集め、自国のアカデミーに入学させ、JIFF の資格取得手続きを開始したのである。2015-16 年のクレルモンユース代表の 59 人の中には、フランス以外の 9 カ国から来た 17 人が含まれていた。

第8項 スタッド・ドゥ・フランススタジアム

1992 年 7 月 2 日、国際サッカー連盟 (FIFA) は、1998 年の FIFA ワールドカップの開催国をフランスに決定したが、その時点でスタッド・ドゥ・フランス・スタジアムは 45,000 人を超えるイベントを開催できるスタジアムはなかった。フランス政府は国際スポーツイベントを開催できる 80,000 席のスタジアムを建設することを決定し 1995 年に起工。

1998 年 1 月 28 日のオープニング戦ではサッカーのフランス代表が、スペイン代表と戦いジダンが最初のゴールを決めた。スタッド・ドゥ・フランス・スタジアムは、ヨーロッパで 6 番目に大きいナショナルスタジアムで収容人数は 80,430 人であった。(コンサート

イベント時には 10 万人)RWC2023 フランス大会、2024 年夏季オリンピックの陸上競技の会場としても使用される。サッカーのフランス代表クラブとフランスラグビー ユニオン両クラブのホームスタジアムとしても知られている。

RWC2023 フランス大会の決勝戦の会場としても活用される予定であり、RWC と、サッカーワールドカップの両大会の決勝戦を開催したスタジアムは、日本の横浜スタジアムについて世界で 2 例目となる。サッカーやラグビー以外にも 2003 年に世界陸上競技選手権大会、2004 年、2005 年、2006 年にレース オブ チャンピオンズ オートレースや世界的に有名なアーティストのコンサート会場としても使用されている。1998 年以来、スタッド・ドゥ フランスは 500 近くのイベントを開催し、3,500 万人近くの観客を迎えていた。

第9項 クラブの収入構造

1) TOP14 クラブの予算と人件費

近年、トップ 14 はクラブの経済力が著しく成長していた。ただしサラリーキャップで述べたように、上限の規制は強化されている状況でありクラブ年間予算の差は以前と比較すると縮小傾向にある。

観客動員数、高額なテレビ放映権契約、補助金、ユーロの為替レートの上昇に助けられ、トップ 14 のクラブは予算全体が増加している。2018-2019 年には、半数のクラブが 3,000 万ユーロを超える予算を出しており、最も多くシーズン予算を計上しているクラブは LOU RUGBY で 48,585,000 €, 日本円にして 68 億 (1€/140 円) となっている。

トップ 14 の選手の平均給与は、2010 年に 15 万 3700 ドルに上昇していると推定されていた。トップ 14 のクラブの富は、世界各国より選手を集め、より強いクラブを構築することが人気を継続的に高く保つことへとつながっている。

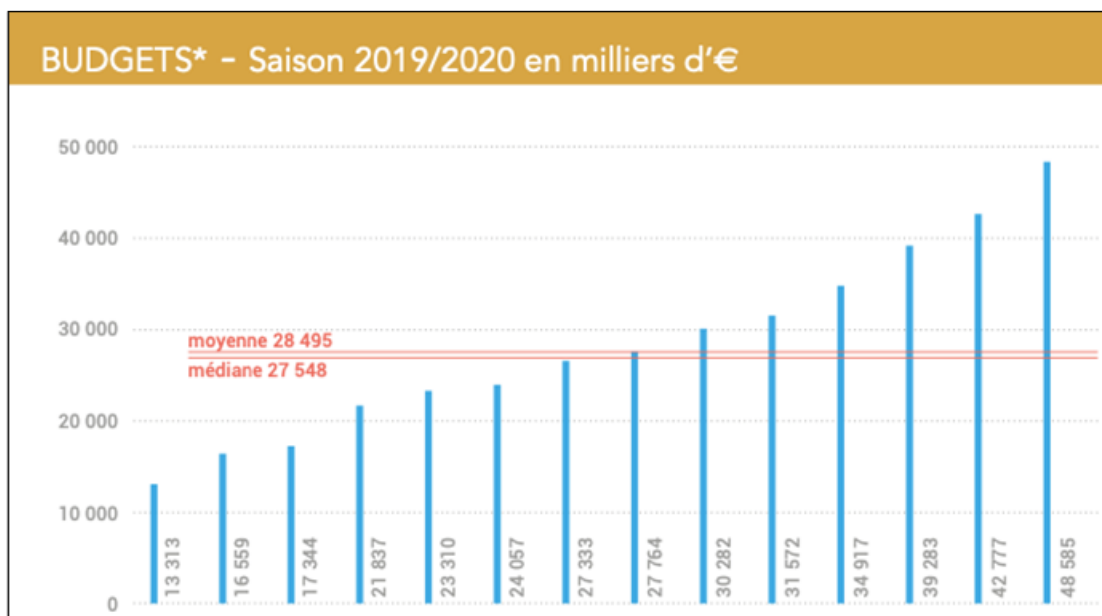


図 14 TOP14 各クラブ予算 2019-2020 シーズン)※チーム名は非公開；RAPPORT DNACG より

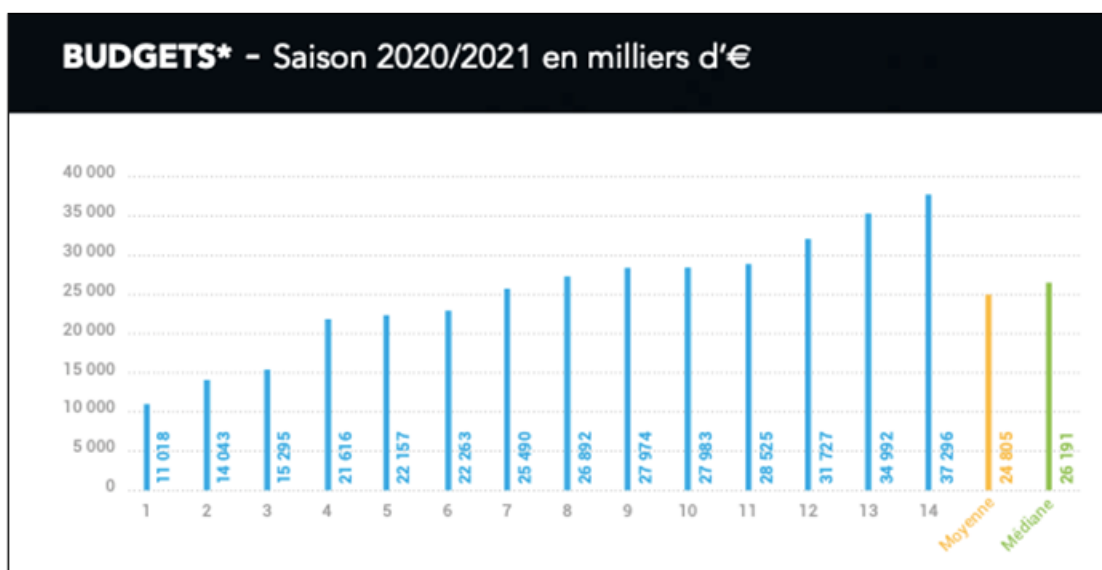


図 15 TOP14 各クラブ予算 2020-2021 シーズン) ※チーム名は非公開；RAPPORT DNACG より

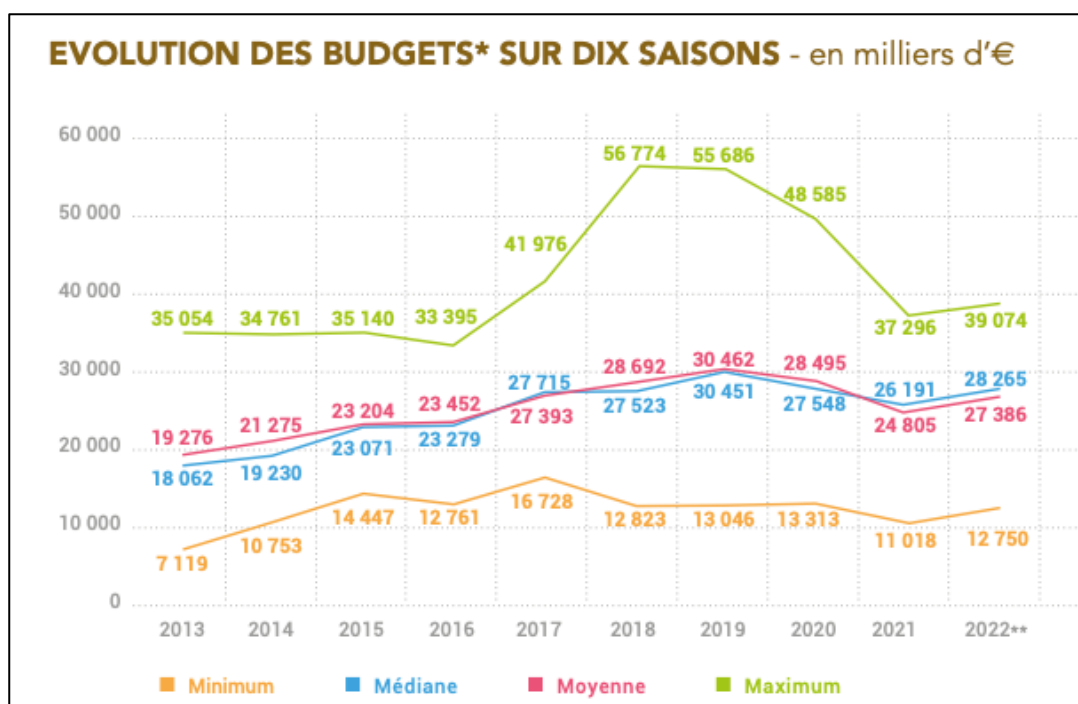


図 16 TOP14 クラブ予算 2013-2022 推移；RAPPORT DNACG より

表 10 クラブ予算と選手給与(2019-2020 シーズン) ; RAPPORT DNACG より筆者作成

	クラブ名	19-20シーズン予算		うち、選手給与		予算全体に
		ユーロ	円 €/140	ユーロ	円 €/140	占める選手給与
1	LOU RUGBY	48,585,000.00 €	¥6,801,900,000	10,601,000.00 €	¥1,484,140,000	22%
2	STADE FRANCAIS PARIS	42,777,000.00 €	¥5,988,780,000	10,472,000.00 €	¥1,466,080,000	24%
3	STADE TOULOUSAIN	39,283,300.00 €	¥5,499,662,000	11,248,000.00 €	¥1,574,720,000	29%
4	RC TOULONNAIS	34,917,000.00 €	¥4,888,380,000	11,501,000.00 €	¥1,610,140,000	33%
5	MONTPELLIER HERAULT RUGBY	31,572,000.00 €	¥4,420,080,000	11,301,000.00 €	¥1,582,140,000	36%
6	ASM CLERMONT AUVERGNE	30,282,000.00 €	¥4,239,480,000	11,409,000.00 €	¥1,597,260,000	38%
7	STADE ROCHELAIS	27,764,000.00 €	¥3,886,960,000	10,974,000.00 €	¥1,536,360,000	40%
8	RACING 92	27,333,000.00 €	¥3,826,620,000	10,180,000.00 €	¥1,425,200,000	37%
9	UNION BORDEAUX-BEGLES	24,057,000.00 €	¥3,367,980,000	9,345,000.00 €	¥1,308,300,000	39%
10	SECTION PALOISE BERNAISE PYRENEE	23,310,000.00 €	¥3,263,400,000	9,879,000.00 €	¥1,383,060,000	42%
11	CASTRES OLYMPIQUE	21,837,000.00 €	¥3,057,180,000	9,125,000.00 €	¥1,277,500,000	42%
12	CA BRIVE CORREZE LIMOUSIN	17,344,000.00 €	¥2,428,160,000	5,195,000.00 €	¥727,300,000	30%
13	AVIRON BAYONNAIS RUGBY PRO	16,559,000.00 €	¥2,318,260,000	5,463,000.00 €	¥764,820,000	33%
14	SU AGEN LOT ET GARONNE	13,313,000.00 €	¥1,863,820,000	3,968,000.00 €	¥555,520,000	30%

2) TOP14 クラブの収支構造

下記の図表は TOP14 の収支構造(2019-20 シーズンと 2020-21 シーズン) 2 シーズンを示した図である。2 シーズンを比較すると、COVID-19 の影響を大きく受けていることが確認できる。

※パートナー企業：48% → 39%(9%低下) / チケット収入：11% → 1%(10%低下)
 こちらの数字を補填するためリーグは 23%→27%。大きな特徴として公的補助金 3%→18%へ引き上げられていることが確認できた。

COVID-19 の影響を受けていない 2019-20 シーズンをベースに考えると、半数近く 48% はパートナー企業によって支えられており、23%がリーグ、11%がチケット収入、その他 16%という収入構造となっていた。

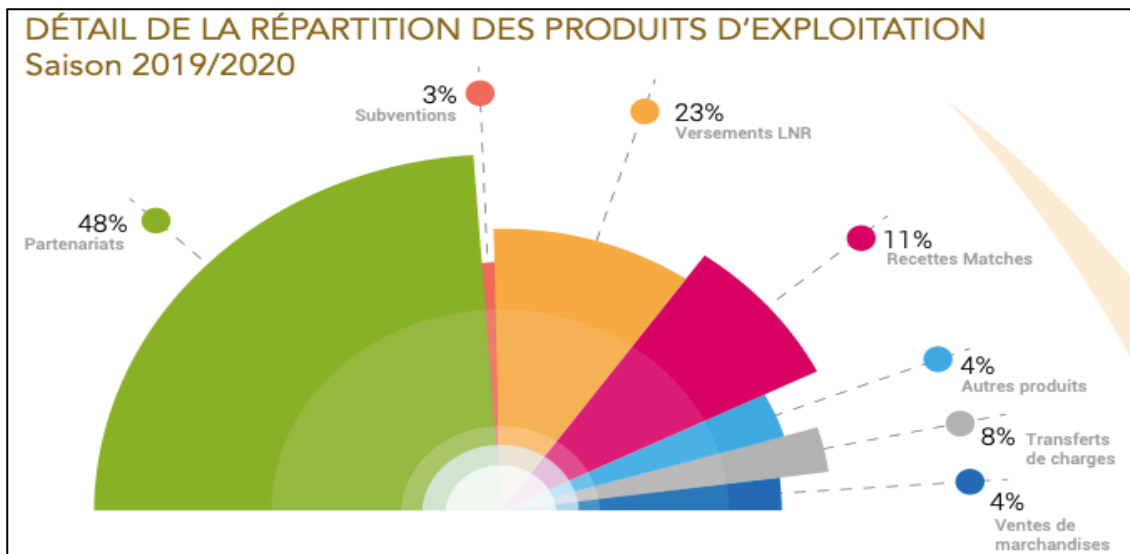


図 17 TOP14 のクラブの収支構造(2019-2020 シーズン) ; RAPPORT DNACG より

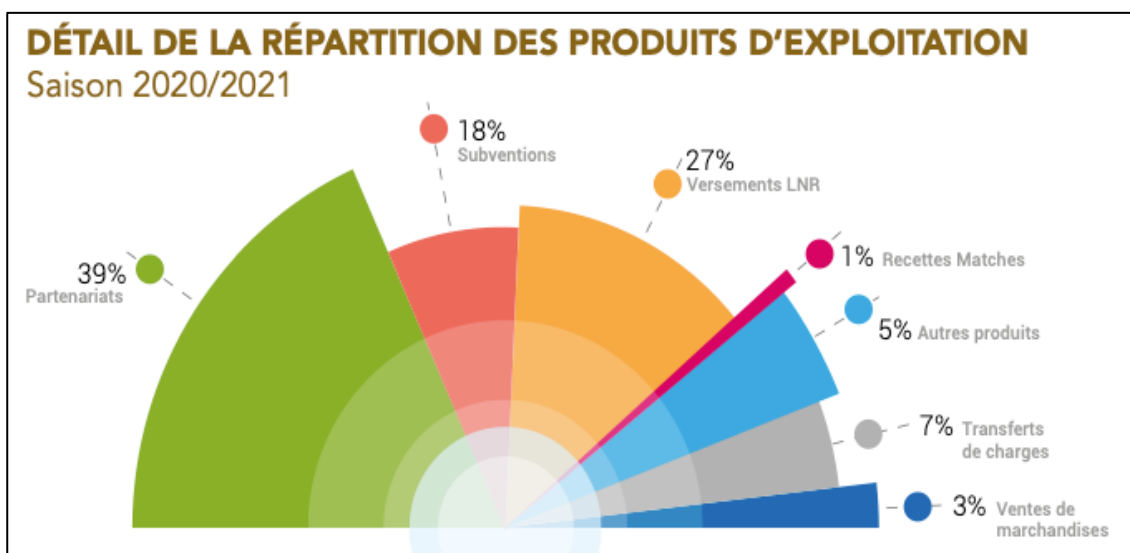


図 18 TOP14 のクラブの収支構造(2020-2021 シーズン) ; RAPPORT DNACG より

第 10 項 RWC

フランスは 2023 年に RWC2023 を開催することが決定している。過去に同国は 1991 年に欧州連合(イギリス・フランス・スコットランド・アイルランド・ウェールズ)での開催に加え、2007 年にも単独開催しており、2023 年で 3 回目の RWC 開催国となっている。

2007 年の開催時には、過去 2 番目の観客動員数となる 226 万人を集め最高入場者数に 21.5 万及ばなかった。1 試合平均 47,150 人が国内外から駆けつけた。(日本開催時、総入場者数 170 万人：平均入場者数 37,877 人)※日本は過去 4 番目

RWC2023 開催都市は 9 都市でボルドー・リヨン・マルセイユ・ナント・ニース・パリ・サン＝テティエンヌ・トゥールーズ・リールであった。使用するスタジアムはナショ

ナルスタジアムとマルセイユ、トゥールーズ以外は TOP14 のクラブは使用しておらず、基本的にはサッカープロリーグのリーグ・アンに所属するサッカークラブのホームスタジアムを使用していた。

表 11 RWC で使用するスタジアム RWC2023 公式サイトより筆者作成

開場 / 修繕		スタジアム名	収容人数
2016年	オリンピック・リヨン/サッカー	Parc Olympique Lyonnais	58,883
2015年	FCジロンダン・ボルドー/サッカー	Nouveau Stade de Bordeaux	42,060
1937年/2014年	オリンピック・マルセイユ/サッカー	Stade Vélodrome	67,847
1984年/1998年	FCナント	Stade de La Beaujoire	35,520
2013年	OGCニース	Allianz Riviera	35,983
1998年	ナショナルスタジアム	Stade de France	81,338
1931年/2014年	ASサンテティエンヌ	Stade Geoffroy-Guichard	42,152
1937年/1998年	トゥールーズFC	Stadium de Toulouse	33,103
1944年	LOSCリール	Stade Pierre-Mauroy	50,096

第4節 RCToulon の事例

Toulon 市街ならびに近郊のショッピングモールなどにあるグッズショップや、学校といった公共の場に練習後やオフの時間を使い選手が出向き、ファンや子供たちとの交流を多くとっていた。また、練習会場も積極的に普段の練習会場とは違う会場で行い、スポンサーのアクティビティとしての位置付けで実施したケースや、地域のクラブや学校など行政関連との関係も深めていた。トレーニング後にはファンなどとの交流やサイン会なども実施し、長いレギュラーシーズンの中にも、ブランディングやマーケティングを意識した活動を行っていた。スタジアムに併設されたショッピングモールには RCToulon のオフィシャルグッズショップが展開されており、試合開催時はもちろんのこと、日常的に市民が活用する場所にも展開されていた。EC サイトやオフィシャルグッズショップのラインナップも豊富で、より若者をターゲットとした戦略が推測された。

試合への移動には専用バスを使用し、国内の試合でも警察官の誘導により信号や渋滞の影響を受けずに会場へ向かっていた。アウェイでの 21 時キックオフの試合後には、選手の体調面や家族との時間を確保するため、当日にスタジアム近郊の空港よりチャーター機で Toulon まで戻ってきていた。2018 年 1 月 1 日に開催されたホームゲームでは、21 時キックオフを実施し、試合終了後の 23 時ごろにピッチ場から 20 分程度花火と音楽をかけファンを盛り上げるなど、日本では想像がつかない事例も経験した。興行試合の日には併設されたホテルでホスピタリティを実施しており、試合だけでなく 1 日を選手の家族やファンが楽しめるよう工夫されていた。



図 19 スタッド マイヨール；RCToulon 公式 HP より

第 5 節 MLR

第 1 項 歴史

1) オリンピックでのメダル獲得

アメリカのラグビーはオリンピックで金メダルを獲得し、選手はファンを引き付けこれまでに続けてきた。アメリカのラグビーの歴史は、1800 年代にさかのぼり、東海岸の大学ではアメリカンフットボール、ラグビー、サッカーなど様々な競技が実施されていた。ラグビーは大学から大学へと広がり全米に拡大した。テキサスとユタを経由して、北東から西に広がったが、アメリカンフットボールの台頭により成長は鈍化した。

ラグビーは 1900 年代初頭まで成長を続け、1905 年から 1913 年にかけてニュージーランドやオーストラリアなどの強豪クラブが定期的に訪れていた。

1924 年、アメリカのラグビーはスタンフォードのラグビークラブがフランスを破ってオリンピックの金メダルを獲得した。パリでの勝利は大騒ぎを引き起こし、選手(アメリカ)はスタジアムを出るために戦うことを余儀なくされた。その後、ラグビーはオリンピック競技から除外され 2016 年にリオデジャネイロで競技（7 人制ラグビー）が再開されるまで、米国はオリンピックチャンピオンとして君臨していた。

2) PRO RUGBY の失敗

米国初のプロラグビーである「ProRugby」はニューヨークの実業家である Doug Shoninger 氏によって 2016 年に設立された。同氏が 2015 年 4 月 21 日に World Rugby と USA Rugby から米国初のプロラグビー運営の認可を得た。そこから、約 1 年後の 2016 年 4 月 17 日に Pro Rugby が開幕した。Shoninger 氏はラグビー経験者ではなかったが、ラグビーに可能性を感じリーグの設立と初年度の運営に必要な 600 万ドルの費用を自己負担し、各地のラグビーコミュニティやスタジアムと交渉しながら参加クラブを募った。その

結果、初年度の加盟クラブは、Sacramento, San Francisco, San Diego, Denver, Ohio の 5 クラブとなった。開幕戦は、Sacramento Express が San Francisco Rush に 37 対 25 で勝利し、観客数は約 3400 人であった。選手はリーグと一括で契約する形を取り、選手の給料は最低 35,000 ドルの試合給を支払っていた。試合中継は、aol.com というオンライン配信と、ケーブルテレビである ONE World Sports で放送が行われた。米国のラグビー界の特徴として大学生の実施人口が多いことから、SNS を活用することで、競技者のファンの獲得に努めた。スポンサー企業は、総額 1000 万ドルのスポンサー収入を得ることができており、Shoninger 氏は 600 万ドルの投資を回収することに成功していた。このように、Shoninger 氏はプロリーグ設立の認可を得てから 1 年で 2016 年の初年度にプロリーグの原型を作り上げることができ、2017 年シーズンから東海岸へリーグを拡大させていく方針ではあった。しかし、リーグの収益を USA Rugby に還元しなかったこと、PRO12 が米国への進出を検討した際に、Shoninger 氏がプロリーグの独占運営権を主張し反対をしたこと等による USA Rugby との関係性の悪化が顕在化したことから、スポンサーの撤退等が相次ぎ 2017 年シーズンの開催を見送ることとなり、2018 年 4 月 21 日に USA Rugby と Pro Rugby の契約は終了した。

3) Major League Rugby の発足

Major League Soccer のリアル・ソルトレイクとナショナルホッケーリーグのセントルイスブルースで幹部を務めていたディーン・ハウズがラグビーユタの上級戦略顧問に就任し、プロラグビーの全米展開への道筋を提供しようと試みた。2017 年 2 月までに、計 9 つのアマチュアラグビーユニオン組織が、翌年から始まるプロリーグ結成への意志を表明した。最終的にはリーグは 7 つのクラブとしてスタートさせた。2017 年 11 月 6 日、MLR と CBS スポーツネットワークは、MLR の最初の主要なテレビ放送権の契約となる複数年のメディアパートナーシップを発表しました。新しいスポーツリーグが発足前に全国テレビ契約を結んだのはアメリカ史上初のことだった。

現在、アメリカのラグビーは劇的なペースで成長しており、アメリカ人のラグビーへの関心が、ラグビーの熱狂に迫いつき始めたため、プロリーグが必要となった。2018 年 MLR は価値観、尊重、包括性、伝統を中心とし、北米でラグビーをプロスポーツとしてスタートさせた。MLR は、カレッジエイトドラフト、ユースプログラムの開発、試合の成長に専念しているリーグ内のアスリートの継続的なサポートにより、ラグビーの道筋を作り続けてきた。MLR は 2018 年の 7 クラブから、2022 年には 13 クラブに進化し、米国から 12 クラブ、カナダから 1 クラブが参加。リーグは初年度から主要な放送パートナーシップにより、北米ラグビーの認知度を上げた。さらに、トップレベルの外国人選手がリーグに参加し続け、アメリカ全体のラグビーが強化され、スキルレベルは年々飛躍的に向上している。2020 年 3 月 12 日、MLR はコロナウィルスの流行により 2020 年シーズンを全シーズン中止にした。4 月 9 日、コロラド・ラブターズはリーグからの離脱を発表した。2020 年 5 月 28 日、ロサンゼルスを拠点とするエクспанションクラブとして LA ジルティニス

が追加され、2021年シーズンから参画することになった。これに続いて2020年6月4日、テキサス州ダラスを本拠地とするダラス・ジャッカルズが2021年シーズンに追加された。しかし2021年1月19日、ダラスはクラブの創設シーズンを2022年に延期することを発表した。

第2項 リーグ戦の開催方式

18週間にわたる試合により構成されており、MLRの13クラブがMLRチャンピオンシップシリーズの出場権をかけて戦う。2019年のレギュラーシーズンは、全クラブがホーム&アウェイで対戦。各クラブは16試合を行い、そのうち半分はホームで行われた。その後、各カンファレンス上位3クラブで構成され、2位と3位のクラブによるワイルドカードゲームと、ワイルドカードの勝者とカンファレンス1位のクラブによるプレーオフが行われた。その結果、各カンファレンスのプレーオフ勝者が、リーグチャンピオンシップで対戦することになった。

第3項 試合日程

MLRのレギュラーシーズンは、2月から6月までの5ヶ月間で、西地区(7クラブ)と東地区(6クラブ)に分かれ、各クラブ16試合(計96試合)が行われている。また、レギュラーシーズンの各カンファレンス上位3クラブが、カンファレンスの優勝クラブを決定させ、チャンピオンシリーズに進む形式となっている。

レギュラーシーズンの試合開始の時間は19:00が最も多く、次いで15:00、20:00であった。決勝戦はRed Bull Arenaで実施されていた。

表12 アメリカの年間スケジュールと試合数；MLR公式HP等より筆者作成

		試合数(最大)	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
米	リーグ	16(+3)	24											
	代表	5												

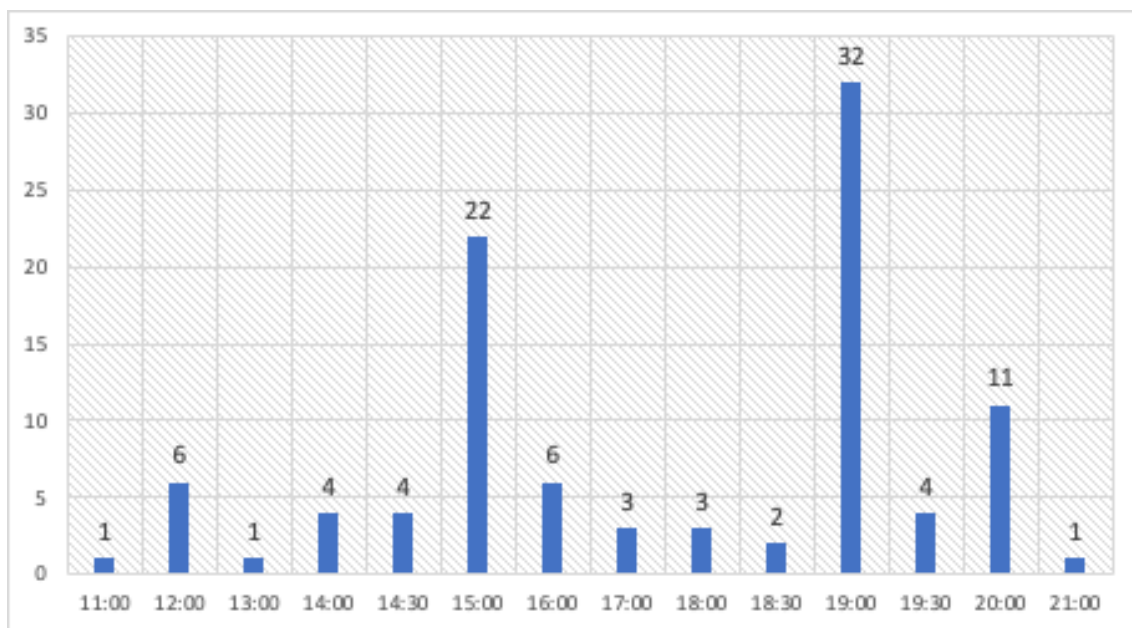


図 20 MLR のキックオフ時間(2020) 公式サイトより筆者作成

第4項 クラブの分布

MLR の前身である PRO RUGBY は 2016 年に 5 クラブで発足し、拠点はカリフォルニア州に 3 クラブ、コロラド州、オハイオ州と地域に偏りがあったことから 1 年で終了した。2018 年に新たに発足した MLR は、7 クラブで始まり、カリフォルニア州、ワシントン州、ユタ州、コロラド州、テキサス州 2 クラブ、ルイジアナ州と西海岸と南部が拠点となり、2019 年にニューヨークとカナダのトロントの 2 クラブが加わり、2019 年 9 クラブ、2020 年東海岸にクラブ数を拡大させた。西海岸と東海岸、カナダのトロントを含む 13 クラブによって構成されていた。

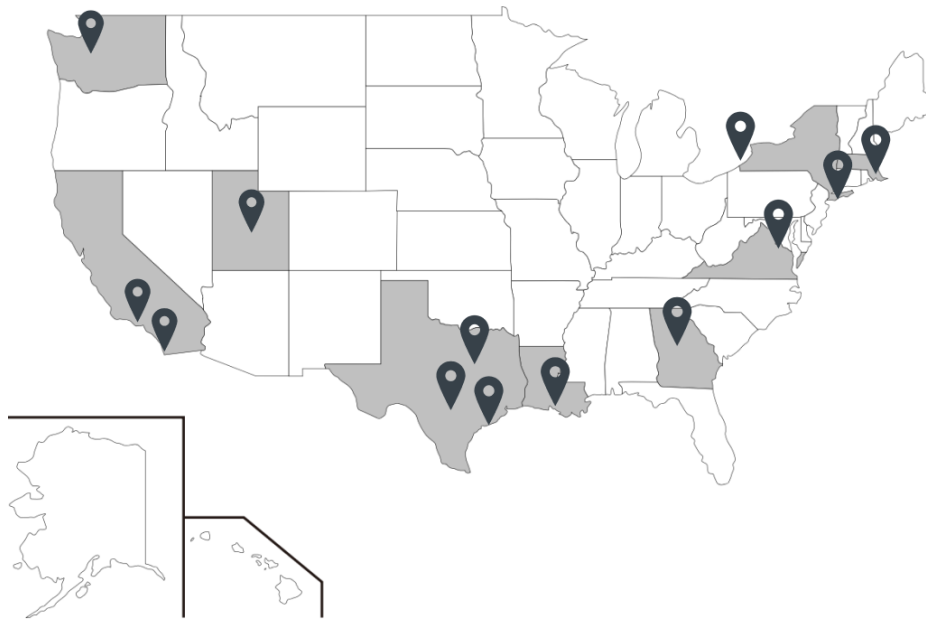


図 21 MLR のクラブの分布；筆者作成

第5項 スタジアム

MLR は陸上競技場や野球場、アメフト場等を借用する形で開催をしていた。収容人数は 2000 人から 77,500 人で、14 ケ所のうち 13 ケ所が 10,000 人未満であった。

また、芝の種類による分離では、2022 年に MLR に参加した 13 クラブの本拠地のうち、トレロ・スタジアム（サンディエゴ・リージョン）、The Gold Mine（ニューオーリンズ・ゴールド）、Bold Stadium（オースティン・ギルグロニス）、アヴィバスタジアム（ヒューストン・セイバーキャッツ）の 4 ケ所が天然芝、その他の 9 ケ所が人工芝のスタジアムとなっている。また、開場年では、13 ケ所の内、6 ケ所が 2000 年以前、2000 年以降に完成したスタジアムが 7 ケ所であった。Memorial Stadium は、収容人数が 77,500 人で、MLR の中でも最大にして最古のスタジアムとなっており、1932 年、1984 年の五輪の会場としても使われた過去を持ち、2021 年 MLR Final の試合もここで行われ、2022 年シーズンは、年間 10 試合で使用された。The Gold Mine は、2020 年にラグビー用のグラウンドとして設計されたスタジアムであり、収容人数は 10,000 人で、ニューオーリンズ・ゴールドが単体で所有していた。2022 年シーズンは年間 14 試合で使用された。MLR は、ラグビー専用スタジアムがまだ少なく、本拠地を転々とするケースも存在している。そして、収容人数も全体的に少ないためスタジアムの席を解放しないエリアなどを設け、収容制限が存在していた。

表 13 MLR のスタジアムと芝生の種類

TEAMS	TOWN	STADIUM	Opened	Capacity	Surface
LA Giltinis	Los Angeles, California	Memorial Coliseum	1923	77,500	Bermuda Grass
Austin Gilgronis	Austin Texas	Bold Stadium	2019	5,000	Natural Grass
Houston SaberCats	Houston, Texas	AVEVA Stadium	2019	5,000	Natural Grass
Utah Warriors	Herriman, Utah	Zions Bank Stadium	2018	5,000	Artificial Turf
Dallas Jackals	Arlington, Texas	Choctaw Stadium	1994	4,000	Bermuda Grass
Seattle Seawolves	Tukwila, Washington	Starfire Stadium	2005	4,000	FieldTurf
San Diego Legion	San Diego, California	SDSU Sports Deck	2000	3,000	Natural Grass
Rugby New York	Hoboken, New Jersey	John F. Kennedy Stadium	1962	2,000	Synthetic Turf
New Orleans Gold	New Orleans, Louisiana	The Gold Mine	1997	10,000	Natural Grass
Toronto Arrows	Langford, British Columbia	Starlight Stadium	2009	6000	FieldTurf
Toronto Arrows	Toronto, Ontario	York Lions Stadium	2015	4,000	Artificial Turf
New England Free Jacks	Quincy, Massachusetts	Veterans Memorial Stadium	1938	5,000	FieldTurf
Old Glory DC	Leesburg, Virginia	Segra Field	2019	5,000	FieldTurf
Rugby ATL	Atlanta, Georgia	Silverbacks Park	2004	5,000	FieldTurf

各スタジアムデータより筆者作成

第6項 シングルエンティ

リーグは、他のアメリカのスポーツリーグと同様に、昇格降格を伴わないシステムで構成されている。メジャーリーグサッカーや、アメリカやカナダの他の主要プロスポーツリーグと同様のシングルエンティティを導入し運営されており、各クラブはリーグが所有し、フランチャイズ運営者はリーグの株式を所有している。

第7項 放映権

2021 年から、リーグの OTT プラットフォーム「The Rugby Network」を確立した。高校レベルの試合からプロレベルの試合までを放送している。翌年には、45,000 人以上の登録加入者を誇り、1,060 万分以上のライブおよびオンデマンドでの配信を行った。シーズンごとのストリーミング視聴者数は、ESPN+ と比較して 383% 増加し、1 試合あたり平均視聴者数は前年比 76% 増加した。

2022 年シーズンは、MLR と FOX スポーツが再び提携し、試合を放送することとなった。メジャーリーグラグビーの番組は、土曜日の午後と日曜日の夕方、週末のプライムタイム枠で放送されていた。CBS Sports Network は、シーズン中、13 試合を全米に放映している。これには、MLR レギュラーシーズンの 10 ラウンドの各ラウンドにおける Game of the Week と、ポストシーズンの全 3 試合が含まれる。ライブストリーミングも CBS スポーツネットワークのストリーミングプラットフォームで視聴可能 Dan Power (Play By Play)、Brian Hightower (Color Analyst)、Stacy Paetz (Sideline) が 2019 年シーズンの CBS スポーツの解説者である。残りの試合は、ESPN プロパティと地域のスポーツネットワークで視聴可能となっている。ESPN は、その様々なプラットフォームの観客にレギュラーシーズンの試合をカバーする 18 試合のパッケージの国内および国際的な権利を保持している。

AT&T Sports Networks は、CBS Sports Network で放送されない試合を、MLR7 クラブのうち 6 クラブをカバーする 17 試合のパッケージを保持。オースティン、ヒューストン、ニューオリンズのホーム&アウェイ戦は、AT&T SportsNet Southwest で放送。シアトルの

試合は Root Sports Northwest で、コロラドとユタの試合はすべて AT&T SportsNet Rocky Mountain で放送されている。

サンディエゴは、CBS スポーツネットワークで放送されないクラブのホーム&アウェイの MLR の全試合がチャンネル 4 の YurView カリフォルニア地元で放映される。

オースティン・エリート・ラグビーは、2019 年シーズン中にテキサスを拠点とする視聴者のために Facebook Watch と提携した。

Rugby United New York は SNY との地域テレビパートナーシップを発表し、SNY は RUNY の初年度（2019 年）の 9 試合を放映し、プレミアゲームは 1 月 27 日（日曜日）午後 5 時（EST）に LIVE 放映。また、NBC Sports Washington と NBC Sports Philadelphia+ は SNY と共に残り 8 試合の試合を放映し、RUNY が NOLA Gold に向かう土曜日午後 3 時（EST）から放映する予定。NBC Sports Regional Networks とのパートナーシップは、RUNY のテレビ市場を東海岸の 2 つの重要な市場に拡大すると予測されている。

トロント・アローズ・ラグビーは、2019 年シーズンの GameTV とのテレビパートナーシップを発表。

2019 年のチャンピオンシップの試合は CBS で放送され、MLR の試合としては初めて無料放送でテレビ放映された。51 万人の 2 人以上の世帯に相当する 32% のスポーツテレビ視聴率を獲得していた。

COVID-19 の流行により、MLR は 2020 年シーズンのスケジュールを調整し、2021 年にリーグが力強く立ち直るように目を向けました。リーグとクラブの関係者は、シーズンに向けて「強力なロスターを構築し、ファン体験を強化するために熱心に取り組んできた」。試合は、CBS スポーツネットワークや Fox スポーツ 2 など、全国およびローカル市場のプラットフォームで放映されました。MLR チャンピオンシップは、2021 年 8 月 1 日（日）に CBS で放送された。

第 8 項 デジタルマーケティング

1) ストリーミング配信

2021 年 3 月 16 日、MLR は RugbyPass と共同で、試合やハイライトなど MLR の全コンテンツを配信する無料ストリーミングプラットフォーム「The Rugby Network/RugbyPass」を立ち上げた。このデジタルネットワークは、北米では初めてのもので、ラグビーファンにとって、ラグビーのあらゆるニーズを満たせる唯一のプラットフォームであった。MLR の一部の試合のライブストリーミング、ラグビーの国際試合、試合のハイライト、舞台裏の独占コンテンツなどが含まれている。

2) MLR の公式アプリ

2021 年 3 月 17 日、MLR は公式モバイルアプリを発表した。このファン向けのアプリは、MLR のニュース速報、スケジュール、試合のスコア、クラブプロフィール、統計、独

占ビデオコンテンツなど、MLR ファンが集う場所となっている。このアプリは、デジタルスポーツの革新者である PT SportSuite とのマルチプラットフォーム契約の一部で、MLR のすべてのデジタルメディア機能を変革するものであった。MLR のアプリは、iPhone の App Store と Android の Google Play でダウンロードすることができる。

2022 年 6 月 26 日記事で MLR のコミッショナーが MLR のデジタル戦略の成長を伝えていた。「北米のラグビー ユニオン大会であるメジャー リーグ ラグビー (MLR) は、観客数と視聴者数の両方が増加し、5 シーズン目に達成した大幅な成長を歓迎しています。The Rugby Network (TRN) ストリーミング サービスの視聴者数は、先月 (6 月) に終了した 2022 MLR シーズンで 55% 増加しました。2021 年初頭にローンチされたこのプラットフォームには、現在 100,000 人を超える加入者がおり、2022 シーズンの初めから 144% 増加しています。Fox での MLR 全体の視聴率も、全国ネットワークとのリニア放送契約に署名した後、65% 増加しました。さらに、昨シーズンの総入場者数は 230,000 人 (40%) 以上増加し、リーグは 75,000 人の新しいファンを獲得したと主張しています。MLR は、そのメディア価値も 49.9% 増加して 1,020 万ドル以上になったと述べています。リーグのソーシャル メディア プラットフォームは 40% 近く成長しましたが、個々のクラブのソーシャル メディアのフォロワー数も増加し、総フォロワー数は 600,000 人近くになりました。ダラス ジャッカルズは昨シーズン、MLR の最新の拡張クラブになりました。MLR は 2022 シーズン中にいくつかの新しいスポンサーを確保し、ファンデータスペシャリストの Pump Jack Dataworks、ブロックチェーンベースの非代替トークン (NFT) プロバイダー NuArca、スポーツ テクノロジー企業 Tappp、および The Rugby Shop UK の親会社である Rugby Now と提携しました。NuArca との契約は、リーグの歴史の中で最大の商業提携として説明されました。MLR のコミッショナーであるジョージ・キレブリューは、次のように述べています。Red Bull Arena で Fox ライブでの 2022 シーズンの終了は、すべての重要な指標で力強い成長を達成した別の成功した年への完璧なショーケース イベントでした。私たちは、2023 年以降も引き続き成功を収めていきます。」

第9項 RWC

USA Rugby は 2031RWC 米国大会の招致に成功した。24 のホストシティの多くは NFL のクラブがあり、11 ケ所は 2026 年 FIFA ワールドカップの会場であった。MLR のクラブがある都市は 9 ケ所 (内、1 ケ所はカナダ) であり、チェアマンの George Killebrew 氏は MLR の加盟クラブを毎年 1、2 クラブ増やしていき RWC2031 までには 28 クラブに拡大し、米国の大都市には必ずラグビークラブがある状態にしていく、という発言があった。

2019 年 4 月下旬、RUNY はフランス人選手のマチュー・バスターローと 2020 年シーズンのトゥーロンからのレンタル契約をしたことを発表し、2019 年 10 月には、オールブラックス代表でワールドカップ優勝複数回のマア・ノヌがサンディエゴ・レギオンに 2020 年

シーズンから加入すると発表された。翌12月にはRWC2019で優勝した南アフリカプロップのテンダイ・ムタワリラとOld Glory DCがリーグと契約した。

2031年には15人制の男子のラグビーワールドカップ、2033年には女子のラグビーワールドカップがアメリカで初めて開催されることが決定し、このラグビーワールドカップは、アメリカでのラグビーを急加速度的に発展させる重要な大会として捉えていた。MLRをまずは盛り上げることを目指し、MLRは外国人枠を広げていた。目的として、リーグそのものの強化に繋げることが挙げられた。海外の有名選手がMLRでプレーすることによって、アメリカ人やその他の国のラグビーファンからの認知度や注目度を高めることを狙っている。2018年から2031年にかけて成長を続けているMLRが、2031年と2033年に開催されるラグビーカップの開催によって、アメリカ代表の発展とともにMLRがさらに人気のリーグとなることを目指していた。このラグビーワールドカップの開催がアメリカでのラグビー人気とMLRへの注目度を高める契機になっていた。そして、将来的にはアメリカの4大スポーツに引けを取らないスポーツリーグとなるポテンシャルを秘めていた。1994年と1999年にアメリカで行われたサッカーワールドカップによって、アメリカのサッカーの発展に影響を与えたように、2031年のラグビーワールドカップの開催がアメリカのラグビーにサッカーと同じような効果を生み出すことを考えていた。

第6節 リーグワン

第1項 歴史

1) 高校ラグビー

全国高等学校ラグビーフットボール大会は毎年12月末～1月初旬に開催され、起源とされている1918年から数えて2022年12月27日に開幕した本大会は102回目となった。起源とされる大会は、第1回日本フットボール優勝大会という名で大阪府豊中市の豊中グラウンドで、1918年1月12日 - 1月13日に開催。関西のクラブを中心に旧制第三高等学校(京都)、全同志社(京都府)、慶應(東京)、京都市立西京高等学校(京都府)の4校によって開催された。1校は棄権し、事実上3校での対戦となりスタートした大会が、現在の全国高校ラグビーフットボールである。

第1回～第5回を豊中グラウンドで開催するも、以降、宝塚競技場、阪神甲子園球場、甲子園南運動場、西宮球場、東京ラグビー場、と様々な会場で開催してきた過去がある。1942年の第24回は戦争激化により、甲子園南球場と福岡県筑紫郡春日村の春日原球場にて開催。1963年の第42回全国高校ラグビーフットボール大会より現在まで、大阪府東大阪市にある花園ラグビー場を舞台に繰り広げてきた歴史を持つ。若いラグーマンの多くは国立競技場ではなく、まずは花園ラグビー場でプレーすることを目標に日々努力する。筆者もその一人であった。

現在では全国47都道府県より51校が一堂に大阪花園ラグビー場へ集結し、トーナメント制により全国の優勝校を決める。第95回本大会(2015年12月-1月)の決勝戦には1万3498人が駆けつけ、大会総来場者数は12万7123人となっていた。

2) 大学ラグビー

① 関東ラグビー対抗戦

第1回日本フットボール優勝大会が開催されて10年後、1928年早稲田大学・慶應大学・明治大学・東京帝国大学・立教大学によって現在の関東ラグビー対抗戦の起源となる試合が開催された。当初は総当たりではなく対戦校はシーズン毎に行う主務会議にて決定しており、総当たりの仕組みとなったのは1997年である。

関東ラグビー協会には、関東大学対抗戦と関東大学リーグ戦が存在する。早稲田・慶應・明治などが主張する対抗戦方式が、全国大学ラグビー選手権大会出場校を選択する上での基準が不明瞭であったため異を唱え、総当たり戦を主張するグループが1968年にリーグ戦グループを立ち上げた。こちらが関東大学リーグ戦である。両組織とも関東ラグビー協会に所属する大学ではあるものの、成り立ちの違いで現在に至る。両組織とも下部リーグとの入れ替え戦が存在し、上位クラブが大学選手権へと出場する。

2022-23 シーズン関東大学対抗戦 A グループ(1部)

早稲田大学・慶應義塾大学・明治大学・筑波大学・立教大学・帝京大学・青山学院大学・成蹊大学

関東大学対抗戦 優勝校/優勝回数

1. 早稲田大学(23回)
2. 明治大学(18回)
3. 帝京大学(11回)
4. 日本体育大学(5回)
5. 慶應義塾大学(4回)

2022-23 シーズン関東大学ラグビーリーグ戦一部

東海大学、大東文化大学、流通経済大学、法政大学、日本大学、関東学院大学、立正大学、東洋大学

関東大学ラグビーリーグ戦 優勝校/優勝回数

1. 法政大学(13回)
2. 東海大学(12回)

3. 関東学院大学(10 回)
4. 大東文化大学(8 回)
5. 専修大学(5 回)

② 早明戦

1923 年 12 月 24 日早稲田大学戸塚グラウンドにて開催された試合が第 1 回とされている。戦前には明治神宮外苑球技場、戦後は秩父宮ラグビー場、1973 年からは現在まで国立競技場にて開催されてきた。関東大学対抗戦での対戦は毎年 12 月の第 1 日曜日に開催されている。1982 年には収容人数を超える 66,999 人を収容が会場に押し寄せた。この数字は、2022 年 10 月 29 日、国立競技場で開催された日本代表 対 ニュージーランド代表の 65,188 人を上回る驚異的な数字である。全盛期ほどではないが注目の高さは現在も続いていた。

1987 年 12 月 6 日 62,000 人

2022 年 12 月 4 日 35,438 人

2021 年 1 月 11 日 57,345 人

③ 全国大学ラグビーフットボール選手権大会

1964 年関東代表 2 校、関西代表 2 校により東西大学ラグビー選手権として開催。翌年には九州 1 校を加え、関東代表 4 校、関西代表 3 校の 8 校で全国学生ラグビー選手権へ改名し実施。1973 年には準決勝・決勝を国立競技場にて開催。1993 年には関東対抗戦上位 4 校、関東リーグ戦上位 4 校、関西上位 4 校、九州上位 1 校の 13 校で対戦が行われた。全国大学ラグビーフットボール選手権大会の初代王者は法政大学であった。

全国大学ラグビーフットボール選手権大会 優勝校/優勝回数

1. 早稲田大学(16 回)
2. 明治大学(13 回)
3. 帝京大学(10 回)
4. 関東学院大学(6 回)
5. 同志社大学(4 回)

表 14 全国大学ラグビーフットボール選手権大会決勝/準決勝観客動員数；公式データより筆者作成

	2021年	2020年	2019年	2018年	2017年	2016年
準決勝	22,546	9,003	21,513	21,934	20,237	15,926
	国立	秩父宮	秩父宮	秩父宮	秩父宮	秩父宮
決勝	24,275	11,411	57,345	20,055	20,489	13,776
	国立	国立	国立	秩父宮	秩父宮	秩父宮

3) 日本ラグビーフットボール選手権大会

1948 年度より全国社会人ラグビーフットボール大会が行われていたものの、当時、社会人ラグビーは関係者以外、ほとんど関心が寄せられていなかった。1961 年 1 月 29 日秩父宮ラグビー場にて日本協会招待 NHK 杯争奪ラグビー大会として開催された。

1964 年 2 月 8 日、日本協会と関東ラグビーフットボール協会は、1964 年度のシーズンより、1964 年 3 月 20 日と 22 日の 2 日間の日程で、真の日本一決定するため、社会人は全国社会人大会優勝の八幡製鉄、2 位の近鉄、学生側は関東大学優秀校の法政大学、2 位の同志社大学の 4 クラブが参加して、第 1 回が花園ラグビー場で開催された。

1965 年より大学側は、大学選手権の優勝校のみが出場することを決定。これにより社会人も、全国社会人ラグビーフットボール大会優勝クラブのみの出場とした。以後 1996 年までこの形式で行われ、毎年成人の日にあたる 1 月 15 日に大会が開催されてきた。

RWC2019 日本大会開催による国内の大幅なスケジュール変更・日本代表強化の一環として開始された海外リーグ参戦。新型コロナウイルスの影響なども重なり、2021 年第 58 回日本選手権を最後に、日本ラグビーフットボール選手権大会長い歴史に幕を下ろす形となった。

4) トップリーグ

トップリーグとは 2003 年から 2020 年まで開催された全国ラグビー社会人リーグのことで、全国の社会人クラブの強豪を一堂に会し、強度の高いハイレベルな試合を増やすことで、日本ラグビーの活性化並びに代表強化を目的に発足された。初年度に参加したクラブは、東日本社会人リーグ・関西社会人リーグ・西日本社会人リーグの優勝クラブサントリー・ヤマハ発動機・サニックスの 3 クラブであった。第 55 回全国社会人大会予選プール上位 2 クラブの三洋電機・近鉄・NEC・リコー・東芝府中・神戸製鋼が参戦を決めた。残りの枠 3 クラブには、クボタ・ワールド・セコムが入り 12 クラブで構成された。2006-07 シーズンには 2 クラブ増え 14 クラブ、2013-14 シーズンよりさらに 2 クラブが増え 16 クラブとなった。トップリーグに参戦した各クラブは、野球やサッカー等のプロスポーツにある、複数のスポンサーで支える形ではなく、基本的には親企業一社でクラブを支える形であった。選手の多くは親企業の正社員であり、外国人選手や数名の日本人のプロ選手によってクラブは構成されていた。トップリーグには、昇格降格を伴い上位 4 クラブによるプレーオフで優勝者を決める形をとっていた。またトップリーグの上位 4 クラブは、プレーオフトーナメントへの出場権と日本選手権の出場権が与えられていた。興行権はリーグが主導となり興行試合を実施し、各支部のラグビー協会が運営を行っていた。開幕した 2003 年から 2018 年は 9 月～2 月の期間で開催していたものの、2019 年 RWC2019 日本大会(9 月 20 日～11 月 2 日)の影響で、開催時期が 1 月～5 月へ開催期間を変更となった。トップリーグは RWC2019 日本大会後に 1 シーズンを戦い終え、幕を下ろすこととなった。

5) リーグワン

2003 年から 18 年続いたジャパンラグビートップリーグ(以下トップリーグ)から新たに、2021 年 6 月 29 日も一般社団法人ジャパンラグビーワンが発足した。トップリーグは 16 クラブにてリーグを実施していたものを、リーグワンでは 3 部制にし、1 部を 12 クラブへとクラブ数を絞り、より強度の高い試合を、高頻度を実施できるように構築された。また大きな変化は、リーグワン以前は、興行権をリーグが持っていたものを、各クラブへ譲渡する形となった。各クラブは独自で試合運営を行い、チケット価格やファンクラブの設定、試合会場の調整、スポンサー獲得など多岐に渡り進めていくこととなる。

また企業スポーツからの独立を目指し、より地域に根ざしたクラブ運営を目的に分社化を推奨しているものの強制力はなく、会社内の事業部として進めることも認められている。また日本最高峰のリーグではあるものの雇用形態は、各クラブばらつきがあるものの、基本的には海外選手や数名の日本人プロフェッショナル選手を除いては親会社の社員として勤務しているため従前のプロ・アマ混在型となっている。

RWC2019 日本大会後には平均来場者数は 11,272 人と急激に伸びたものの、翌年のリーグワン初年には平均入場者数 4100 人と W 杯以前の数字にも戻っていた。

第 2 項 リーグ戦の開催方式

12 クラブを 2 つのカンファレンス（6 クラブ）に分けて行う。カンファレンス内のクラブでホーム&アウェイの 2 回総当たりの対戦（全 60 試合）とカンファレンス外のクラブの 1 回総当たり（ホームまたはアウェイ）による交流戦（36 試合）の合計 96 試合（1 クラブ当たり 16 試合）を行う。順位は 16 試合終了時の勝ち点で決まり、リーグ戦終了後、上位 4 クラブを対象としたプレーオフ（決勝トーナメント）を行い、その結果によって優勝を決める。5 位以下についてはレギュラーシーズンの結果のみに基づいて決定する。2022 シーズンの開幕戦、並びにプレーオフはリーグ主催・主管扱いとし、試合会場の設定はリーグ側で決定していた。

第 3 項 試合日程

2020 年に開幕したリーグワンのシーズンは 1 月から 5 月にかけて各クラブ 16 試合を戦っていた。昇格降格を伴い、優勝者はそれぞれのカンファレンスで勝ち残った 2 クラブずつがプレーオフへ進みトーナメントによって決めていた。

表 15 日本の年間スケジュールと試合数；リーグワン HP 等より筆者作成

		試合数(最大)	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
日	リーグ	16(+2)												
	代表	7												

第4項 クラブの分布



図 22 リーグワンのクラブ分布；筆者作成

リーグワン Devision1 に所属する 12 クラブは首都圏に 8 クラブ、関西 2 クラブ、東海 2 クラブと東名阪の太平洋側に集約されている。これまでラグビークラブは企業スポーツとして進化を遂げ、大手企業一社でラグビー界をきた背景があるためである。英仏米と比較した場合でも国土に対してこれほどにもエリアが絞られた形で本拠地を構えているケースは確認できなかった。

第5項 スタジアム

日本のラグビー専用スタジアムは、札幌月寒ラグビー場(北海道)、釜石復興スタジアム(岩手県)、秩父宮ラグビー場(東京都)、熊谷ラグビー場(埼玉県)、パロマ瑞穂ラグビー場(愛知県)、花園ラグビー場(大阪府)の 6 つが存在する。

RWC2019 開催にあたり、新設や整備されたスタジアムは、釜石鶴住居復興スタジアムと熊谷ラグビー場の二カ所だった。

釜石鶴住居復興スタジアムは、東日本大震災からの復興を象徴するスタジアムとして新設された。新設されたスタジアムの敷地は、震災で津波の大きな被害を受けた旧鶴住居小学校、釜石東中学校の跡地に建設されている。多くの方が犠牲になった一方で、旧鶴住居小学校、釜石東中学校の子どもたちが、手を取り合って迅速に避難し、難を逃れたことから「震災の記憶と防災の知恵」を次世代に伝える役割を持つスタジアムとも言われている。メインスタンド 3,010 席 バックスタンド 2,990 席の計 6,000 席が設けられている。

RWC2019 時にはゴール裏に仮設スタンドを設置し 14,025 人が来場した。来場者の中には、釜石市内の全小中学校の児童・生徒 14 校 2,228 人が含まれており、試合を観戦した他、復興支援への感謝と復興に力強く取り組む姿を国内外に発信した。また、試合直前にはブルーインパルスの展示飛行や選手の入場後に東日本大震災で亡くなられた方々への黙祷を選手・観客全員で行った。

また、釜石には新日鉄釜石が本拠地を置いており、昭和 54 年から昭和 60 年まで、日本選手権 7 連覇の偉業を成し遂げ、北の鉄人と評された。日本のラグビー界に大きく貢献をしたことも RWC2019 会場となった要因の一つである。

熊谷ラグビー場は、1991 年に建設されて以降、2000 年より毎年 3 月末から 4 月の始めにかけて、全国高等学校選抜ラグビーフットボール大会が開催されてきた。都心からの距離も近いことから、ラグビー日本代表やユース世代の練習拠点となった時期もあり、多くのラグビーファンには浸しみのあるスタジアムである。RWC2019 の開催に合わせて、改修前の収容能力は芝生席込み 24,000 人（座席 9232 人、立ち見 4828 人）だったものを、全面座席 24,000 席に改修。新たにナイター照明塔、大型映像装置、屋根拡張等を行った。現在はリーグワンに所属するクラブの本拠地となっている。

日本の場合、ラグビー専用スタジアムは 6 カ所でリーグワンの Devision1 に所属する東京拠点のクラブは秩父宮に加え複数の会場をホームスタジアムとしていた。その他サッカー専用スタジアムを利用する場合は、リーグワンが 1 月～5 月に開催することから、J リーグの試合日程が決まらなると最終的な日程確保ができない状況であり、会場確保に課題があった。全クラブが 2023-24 シーズンまでに 15,000 人以上収容のスタジアムを確保できるよう努めると示されているものの、現状、秩父宮ラグビー場を使用しているクラブは東京 S G・BL 東京・東京 B R・SA 浦安の 4 クラブで、熊谷ラグビー場は埼玉 W K が使用していた。その他のクラブは複数の会場でホームゲームを開催している状況であった。

表 16 関東 8 クラブの使用スタジアム (2022-2023) ; 筆者作成

<リーグワン関東 8 クラブ> ○ = ラグビー専用スタジアム

チーム名	主たるホームスタジアム	収容人数
東京SG	味の素スタジアム	49,970
	秩父宮ラグビー場○	20,000
BL東京	味の素スタジアム	49,970
	秩父宮ラグビー場○	20,000
	駒沢オリンピック公園総合運動場陸上競技場	20,010
BR東京	駒沢オリンピック公園総合運動場陸上競技場	20,010
	秩父宮ラグビー場○	20,000
SA浦安	秩父宮ラグビー場○	20,000
	江東区夢の島陸上競技場	6,950
横浜E	ニッパツ三ツ沢球技場	15,454
	昭和電工ドーム	40,000
GR東葛	柏の葉公園総合競技場	20,000
S東京ベイ	江戸川区陸上競技場	5,050
埼玉WK	熊谷ラグビー場○	24,000

表 17 関西 4 クラブの使用スタジアム (2022-2023) ; 筆者作成

<リーグワン東海・関西 4 クラブ> ○ = ラグビー専用スタジアム

チーム名	主たるホームスタジアム	収容人数
静岡BR	ヤマハスタジアム	15,165
	エコパスタジアム	50,889
	IAIスタジアム	20,248
トヨタV	豊田スタジアム	44,380
	パロマ瑞穂ラグビー場○	20,000
神戸S	神戸総合運動公園ユニバー記念競技場	35,910
	ノエビアスタジアム神戸	29,631
RH大阪	ヨドコウ桜スタジアム	24,481
	ヤンマースタジアム長居	47,853
	ヤンマーフィールド長居	15,516

表 18 RWC2019 使用スタジアムの陸上トラックの有無と J リーグクラブの使用状況

	収容人数	陸上トラック	Jクラブの拠点
横浜国際総合競技場	72,327	○	横浜FM
小笠山総合運動公園エコパスタジアム	50,889	○	磐田
東京スタジアム	49,970	○	FC東京、東京V
豊田スタジアム	45,000	-	名古屋
札幌ドーム	41,410	-	札幌
大分スポーツ公園総合競技場	40,000	○	大分
熊本県民総合運動公園陸上競技場	32,000	○	熊本
神戸市御崎公園球技場	30,312	○	神戸
東大阪市花園ラグビー場	26,544	-	-
熊谷ラグビー場	24,000	-	-
東平尾公園博多の森球技場	22,563	○	福岡
釜石鶴住居復興スタジアム	16,187	-	-

1) Jクラブの国立競技場活用について

1990 年ホームタウン制、ホームスタジアムの確保、拠出金など J リーグ参加条件に含まれ、1993 年に J リーグは、オリジナル 10 (鹿島/市原/浦和/東京 V / 横浜 M/ 横浜 F/ 清水 / 名古屋 G/大阪/ 広島/) で開幕していた。1994 年にジュビロ磐田、ベルマーレ平塚が加盟。翌年 1995 年には C 大阪、柏レイソルが加盟し 14 クラブとなっていた。国立競技場の利用回数は、1993 年 16 回、1994 年 28 回、1995 年には最も利用回数が多く 31 回であった。3 年間で使用した回数は 75 回。75 回のうちホームである東京 V 以外のクラブの利用回数は 60 回となっていた。

表 19 J リーグクラブの国立競技場使用回数 1993-2022 ; J リーグ公式 HP より筆者作成

	東京		埼玉	神奈川				千葉		茨城	静岡		愛知	新潟	山梨	総計
	FC東京	東京V	浦和	横浜FC	横浜FM	平塚	川崎F	千葉	柏	鹿島	清水	磐田	名古屋	新潟	甲府	
1993		5	1	1	1			4			3		1			16
1994		6	4	3	3	2		5		1	2		2			28
1995		4	3	4	4	3		3	3	3	2	1	1			31
1996		3	3	2	3	2		2	2		1					18
1997		2	2	2		1		2	1	1						11
1998		4	3		1	2		1	2							13
1999		3	3			1		1	1	6						15
2000	10	4			2		1	1		4						22
2001	1		2		1			1	1	4						10
2002	3	2	1		4			2	2							14
2003	1	2			1			2	1		1					8
2004	2	3			2			2	1					1		11
2005	2	3			1			1	2							9
2006	2										1					3
2007	1			2					2						1	6
2008	2	3			1				2							8
2009	2								2							4
2010	2															2
2011									2	1					1	4
2012	1								2							3
2013	3						1		2						1	7
2014	1														2	3
2022	2										1					3
総計	35	44	22	14	24	11	2	27	28	20	11	1	4	1	5	249

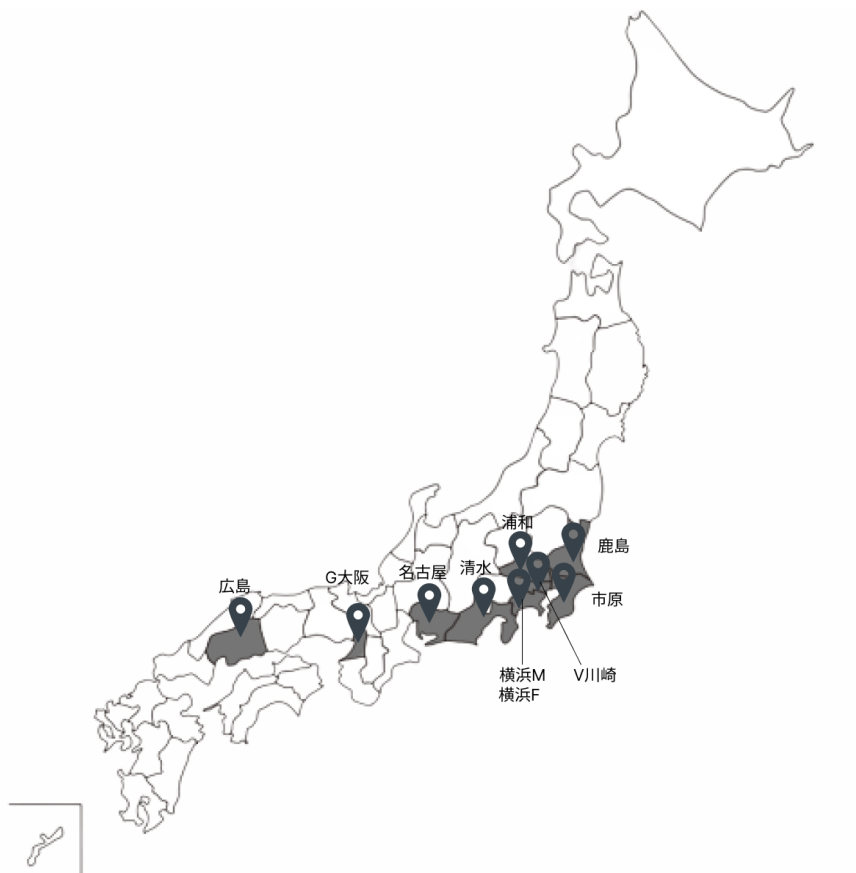


図 23 Jリーグのオリジナル10本拠地；筆者作成

第6項 観客数

観客動員数は RWC2019 の影響もあり 2020 年に平均入場者数 11,279 人と主要国と肩を並べるまでになった。トップリーグからリーグワンへとリーグ名を変え、各チームに興行権が割り当てられたものの、翌年のリーグワン開幕 2021 年には 4100 人と入場者数は減少した。

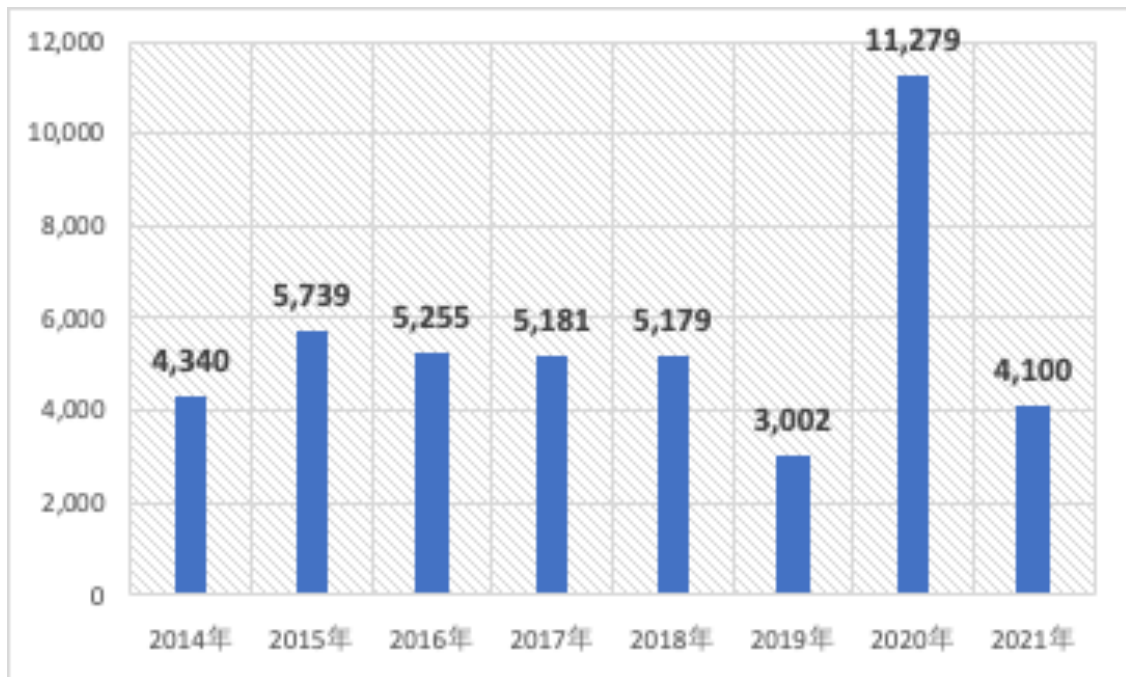


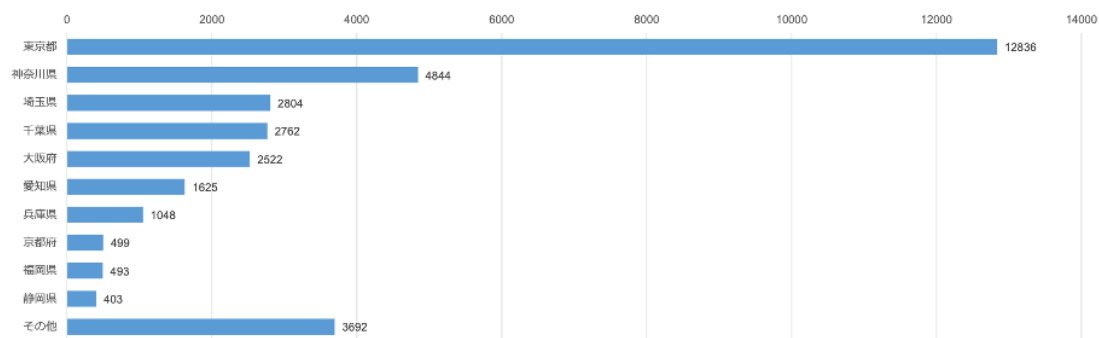
図 24 観客動員数推移(2014-2021) 公式サイトより筆者作成

第7項 マーケティング

リーグワンになり、興行権が各クラブに譲渡されたため、試合の運営・全席のチケット販売・ファンクラブなどのサービス提供・会場演出などを行うことができるようになったものの、初年度より各クラブはさまざまな取り組みを行っているが、集客にはつながっていない現状がある。そのため、チケット販売やグッズ販売、プロモーション活動をリーグが主導となり、ジャパンラグビーリーグワン、日本ラグビーフットボール協会、ソニーグループ株式会社の三者による合弁企業ジャパンラグビーマーケティング株式会社を設立。今後チケットサイトの統一や、プロモーション強化に繋がることがわかった。現状リーグの共通プラットフォームが完全に整備されておらず、従来のシステムを使用していた。アウェイのチケット購入希望者は、他クラブのチケットサイトへ登録するか、従来使用していた共通プラットフォームで購入はできるものの、各クラブが進めるチケットシステムに観戦しやすい席を多く配席する傾向にある。現在従来のチケットシステムに登録している

ファンの属性の多くは首都圏に集中しており、人気の高い日本代表戦や、大学ラグビーを中心に進んできた日本ラグビー界を象徴するデータとなっていた。

購入者属性 | 都道府県分布



東京都在住者が全体の約40%、上位関東圏で全体の約70%となり、観戦者が首都圏に集中している

図 25 チケットの購入者属性；引用元リーグワン資料

さらに、日本ラグビーのファンエンゲージメント事業を行う新会社である「ジャパンラグビーマーケティング株式会社」の設立に関する合弁契約を締結していた。新会社によるファンエンゲージメントの主な取り組みは以下の通りであった。

- ・ 日本代表とリーグワンの両方のアセット、コンテンツを活かしたラグビーファン層の拡大
- ・ スタジアムでの新たなエンタテインメント観戦体験の創出
- ・ リアルとデジタルの両方でファンがラグビーを楽しむことができるイベントやサービスを提供
- ・ モバイルに最適化された新チケットサービスの導入
- ・ 公式アプリなどデジタルを活用したラグビー情報コンテンツの積極的な発信

第8項 外国人制度

1) 外国人選手の出場に関する規定

金銭的な規制には明確な罰則がないものの、外国人選手の登録・出場には明確な規約が存在する。リーグでは現在、外国人選手が公式試合に出場するために、カテゴリーを3つに分け、出場できる外国人選手に制限を設けている。またカテゴリー毎に細かくルール化されている。登録区分や要件は以下の通りである。

表 20 外国人選手のカテゴリ

- | |
|--|
| ① カテゴリA（日本代表の実績または資格あり）
② カテゴリB（日本代表の資格獲得見込み）
③ カテゴリC（他国代表歴あり等、①②以外） |
|--|

表 21 第 10 条〔登録区分の要件〕

- | |
|--|
| <p>(1) 「カテゴリA」として登録することができる選手は、以下の 1~3 の条件のいずれかを満たす者とする。</p> <p>① 日本代表歴のある者。なお、代表歴のある者の定義については、World Rugby(以下「ワールドラグビー」という)の定める「REGULATION 8. ELIGIBILITY TO PLAY FOR NATIONAL REPRESENTATIVE TEAMS」によるものとする。</p> <p>② 日本代表歴のない者のうち以下の a~e のいずれかを満たす者。</p> <p>a) 日本で出生しており、他の協会または地域の代表歴がないこと。</p> <p>b) 両親、祖父母の 1 人が日本で出生しており、本人に他の協会または地域の代表歴がないこと。</p> <p>c) 選手登録を行った当該シーズン以下「当該シーズンという」)開始日時点で、48 ヶ月間以上継続して日本を居住地としており(以下「継続居住要件」という)、他の協会または地域の代表歴がないこと。なお、ここでいう「継続」とは、日本国外滞在日数が年間 62 日以下であることを意味し、日本以外での出生者を対象として入国管理局が発行する出入国記録により、日本国外滞在日数が確認できることを条件とする。</p> <p>d) 当該シーズン開始日時点で直前の累計 9 年間日本を居住地としており(以下「累計居住要件」という)、他の協会または地域の代表歴がないこと。なお、ここでいう「累計」とは、出生時からシーズン開始日までを対象に、日本を主たる居住地として居住していた期間を意味する。</p> <p>e) 継続居住要件を充足し、日本に留学、居住していることを在学証明書、または卒業証明書により証明することができ、かつ在学中の国外滞在日数が年間 62 日以下であることが、入国管理局が発行する出入国記録により確認することのできる留学生であること。</p> <p>③ 以下の a~e のいずれかを満たす者。</p> <p>a) 2016 年 8 月 31 日以前に日本国籍取得選手として日本協会に登録していたこと。なお、登録時点以前での他の協会または地域の代表歴の有無は問わない。</p> <p>b) 2021 年 11 月 30 日(本規程第 12 条に定める追加登録の場合は、2021 年 12 月 28 日)以前に日本国籍取得選手として日本協会に登録、または認定されて追加登録されていること。ただし、時期を問わず他の協会または地域での代表歴がないことを条件とする。</p> <p>c) 2016 年 8 月 31 日以前に特別永住権取得選手として日本協会に登録していたこと。なお、登録以前の他の協会または地域の代表歴の有無は問わない。</p> |
|--|

- d) 2017 年 8 月 31 日以前に日本での義務教育修了者として、日本協会に登録を行っており、引き続き日本に在住していること。ただし、時期を問わず他の協会または地域での代表歴がないことを条件とする。
 - e) 2021 年度シーズン開始以前に「アジア枠」該当選手として日本協会に登録していたこと、ただし、時期を問わず、他の協会または地域での代表歴がないことが条件とする。
- (2) 「カテゴリーB」として登録することができる選手は、以下の 1 または 2 の条件のいずれかを満たす者とする。
- ① 他の協会または地域の代表歴のない者のうち以下のアまたはイのいずれかに該当する者。
 - a) 当該シーズン開始日時点で、継続居住要件または累計居住要件を満たしておらず、将来的に、継続居住要件または累計居住要件を満たした場合に日本代表資格を得られる可能性があること。
 - b) 2021 年 11 月 30 日以前に日本国籍取得を申請しているが、2021 年 12 月 28 日までに当該申請が認定されていないこと。ただし、2021 年 12 月 29 日以降に当該申請が認められた場合は、2023 シーズンよりカテゴリーA の選手として登録することができる。
 - ② 他の協会または地域の代表歴のある者のうち以下に該当する者。
- 2021 年シーズン開始以前に「アジア枠」該当選手として日本協会に登録していたこと
- (3) 「カテゴリーC」として登録することができる選手は、以下の条件を満たす者とする。カテゴリーA およびカテゴリーB のいずれにも当てはまらないこと。
 - (4) 正会員は、同一シーズン中に、一旦登録した選手のカテゴリーを変更することはできない。
 - (5) 正会員が行うクラブ登録は、下図「クラブ登録枠」の要件を満たさなければならない。
 - (6) 正会員が同一の試合にエントリーすることのできる選手の上限は、カテゴリーごとに下図「試合 23 名登録枠(エントリー枠)」のとおりとする。
 - (7) 正会員が同時に出場させることのできる選手の上限は、カテゴリーごとに下図「同時出場可能枠」のとおりとする。
 - (8) カテゴリーB 選手は、カテゴリーC 選手として試合出場させることができる。

表 22 リーグワン 2022-23 選手登録区分；NTT ジャパンラグビー リーグワン 2022-23 選手登録区分についてより引用

2022-23シーズン		チーム登録枠	試合23名登録枠 (エントリー枠)	同時出場可能枠
カテゴリA	日本代表資格あり	総選手登録数の80%以上。ただし、総選手登録数が51名以上の場合は、カテゴリBおよびCを除いた人数 ※少数点以下、切り下げ	17名以上。ただし、22名登録の場合、カテゴリAは16名以上	11名以上
カテゴリB	日本代表資格獲得見込み	カテゴリBおよびCの合計で10名以下または20%以下（いずれか小さい方）、且つカテゴリCは3名以下 ※少数点以下、切り上げ	カテゴリBおよびCの合計で6名以下且つカテゴリCは3名以下	カテゴリBおよびCの合計で4名以下且つカテゴリCは3名以下
カテゴリC	他の協会または地域の代表歴あり、上記以外			

またラグビー日本代表の出場枠についても冒頭で整理した。ラグビー日本代表のみならず、世界各国の代表選出のルールは明確に示されている。多くの方が、日本代表になぜ日本代表に外国籍の選手がいるのか、疑問に感じる方も多いはずである。ルールを示す前に簡単にお伝えするのであれば、ラグビー界は国籍主義ではなく、その国でラグビーをプレーしている人達の代表であるということであるということである。具体的なルールは以下の4つである。

2) 外国人選手の代表資格

表 23

a) 当該国で出生している
b) 両親、祖父母の1人が当該国で出生している
c) 60ヶ月間継続して当該国を居住地としている。
d) 累積で10年間当該国に居住している。

上記の資格に加え、2022年1月1日に大きな代表資格変更がなされた。これまで、一度代表に選出され代表戦に出場した場合、生涯にわたり他国での代表戦に出場することはできなかったが、資格変更によりある一定の資格を満たすことによって2か国での出場が可能となった。一定の資格は以下の通りに示した。

表 24

・ 36ヶ月(3年)代表試合へ出場していない。
・ 選手が転出を希望する国で生まれている。または親か祖父母のうち誰かがその国で生まれている。
・ 申請についてワールドラグビーの承認。

上記の規約を満たすことができれば、2カ国での代表出場が可能となる。

3) 外国人選手の獲得状況

各クラブが、自らのクラブを強化するにあたり外国人選手獲得に力を注いでいる。現在リーグワンには、現役のオールブラックス(ニュージーランド代表)やスプリングボクス(南アフリカ代表)、ワラビーズ(オーストラリア代表)の選手をはじめ世界のトップ選手が所属する世界でもレベルの高いリーグのひとつになっている。トップリーグ前期では、高校や大学時代を日本で過ごしたポリネシア(トンガ王国が最多)の選手が多く在籍していた。その後、世界強豪国の代表を引退し現役を続行している選手が各クラブに所属し、後期からリーグワンに移行してからは、世界強豪国の現役代表選手が在籍する時代へと突入している。世界の主要リーグではサラリーキャップの規定が明確に示されているものの、リーグワンでは、トップリーグ時代に定められたサラリーキャップ、各クラブの外国籍選手の報酬総額を2億5000万円以内とするサラリーキャップ制に似た形式は確認できたが、あくまでも紳士協定で罰則はなく強制力もない。RWC 後には多くの海外選手が、日本クラブとの契約が水面下で動いており、リーグワン各クラブは RWC2023 フランス大会後に大物選手との契約を発表次々に発表している。

現在リーグワンには、南半球のオールブラックス(ニュージーランド代表)・スプリングボクス(南アフリカ代表)・ワラビーズ(オーストラリア代表)の選手が多く在籍しており、RWC2019 日本大会で優勝を果たした、南アフリカ代表のメンバー31名中9名が、在籍しており、過去に在籍していた選手を含めると優勝メンバーの31名中17名と半数以上が日本のリーグに参戦していたこととなる。また南半球が多くを占める海外勢だが、現在欧州(イングランド・ウェールズ・スコットランド)や南米(アルゼンチン)などからも選手が移籍している世界でも注目のリーグとなっている。

海外の大物は選手だけではない、2011年にはアシスタントコーチとし RWC2011 NZ 大会で優勝、2015年 RWC2015 イングランド大会ではヘッドコーチとして優勝、ワールドラグビーの年間最優秀コーチ賞に4度(2012~2014、2016)も輝いた世界的名将ステーブ・ハンセンはリーグワンのクラブのスタッフとして在籍している。またオーストラリア代表監督を務め、現在はアルゼンチン代表監督で、世界のラグビー界をリードするマイケル・チェイカー氏もリーグワンのクラブに在籍している。現役の選手のみならず、世界的に優秀なヘッドコーチも多く在籍している。

第9項 アーリーエントリー制度

リーグワン参加条件の一つにクラブがアカデミーを持つことが明記されている。次世代の子どもたちの育成も大きなテーマである。

またリーグワンに入団が内定している選手に対し、2023 年 1 月で閉幕する大学選手権で大学生はシーズンを終えることから、大学の卒業前にリーグワンへ出場できるアーリーエントリー制度を下記のとおり設けたる取り組みをスタートさせた。

若手選手の強化・育成の観点から、大学クラブで選手登録し、大学最終学年に所属している選手のうち、ジャパンラグビーリーグワン参加クラブに所属が内定している選手について、所定の手続き後、当該年度の全国大学ラグビーフットボール選手権終了後からジャパンラグビー リーグワン公式戦に試合エントリーできる制度であった。

表 25 日本ラグビーフットボール協会(以下、JRFU) 選手の移籍に関する規程 (学生クラブの選手の移籍)

第 4 条

大学クラブ、高専クラブ又は高校クラブの選手として登録されている選手は、登録された年度（4 月から 3 月まで）と同一の年度内において他のクラブに移籍する登録は認められない。ただし、廃校、所属クラブの廃部その他選手自身の責に帰すことのできない事由により移籍する場合、又は大学クラブに登録されている選手の内、一般社団法人リーグワンが定める「選手契約および登録に関する規程」第 11 条(6)が適用される場合はこの限りでない。

表 26 ジャパンラグビーリーグワン(以下、JRLO) 選手契約および登録に関する規程 第 11 条〔選手の追加登録〕

(6) 第 8 条第 2 項の定めにかかわらず、正会員は、4 年制大学の大学クラブに所属する選手のうち、大学の最終学年又は大学院に所属し、かつ、当該シーズンの 4 月以降に正会員に所属することが内定している選手について、以下の書面を提出することにより、シーズン開始日以降も、JRLO にリーグ登録することができる。ただし、当該選手の試合エントリーは、リーグ登録を完了した日から 14 日目以降かつ当該年度の大学選手権の全日程終了後から可能とする。なお、カテゴリー B および C のリーグ登録者数は前項の選手登録枠内とする。このことによりリーグへ早期に入団でき次世代の早期育成にもつながる。

第 10 項 RWC

アジア初開催となった RWC2019 において日本代表は史上初のグループリーグ突破を全勝で終え、決勝トーナメント進出を決めた。グループステージ最終戦のベスト 8 をかけたスコットランド戦の平均視聴率は 39.2%、瞬間最高視聴率は 53.7%を記録した。新興国である日本大会の開催を不安視する声も上がる中ではあったが、12 開催都市で 44 日間大会が開催された。12 開催都市は以下の通りである。1.札幌市-札幌ドーム 2.岩手県・釜石市-釜石鶴住居復興スタジアム 3.埼玉県・熊谷市-熊谷ラグビー場 4.東京都-東京スタジアム 5.

神奈川県・横浜市-横浜国際総合競技場 6. 静岡県-小笠山総合運動公園エコパスタジアム 7. 愛知県・豊田市-豊田スタジアム 8. 大阪府・東大阪市-東大阪市花園ラグビー場 9. 神戸市-神戸市御崎公園球技場 10. 福岡県・福岡市-東平尾公園博多の森球技場 11. 熊本県・熊本市-熊本県民総合運動公園陸上競技場 12. 大分県-大分スポーツ公園総合競技場。

また開催都市も含め国内には16のファンゾーンも設けられ約114万人がスタジアム外でもラグビーに携わる機会となった。大会のチケット販売率は過去最高の99%となり約172万のファンがスタジアムで観戦したことになる。172万枚のチケットのうち49万枚(28%)を海外の方が購入し来日した。76%が東京から入国しており、次いで大阪が9%となり、交通、宿泊、飲食等で経済波及効果を押し上げた形となった。経済波及効果は6,464億円とも言われ、雇用創出効果は46,340人となっている。最も多く訪日したのは欧州からで13,100人にも及んだ。大会ボランティア参加者は13,000人を数え、16会場となったファンゾーン入場者数は110万を超えた。ソーシャルメディアの再生回数は20億回を超え、テレビ視聴者は前回大会の2015年イングランド大会を越え8億5728万(前回大会6億7853万人)となった。また225万人のアジアの人々がImpact Beyondプログラムを通じてラグビーを体験した。(日本では769,000人の小学生が学校でタグラグビーを体験)。

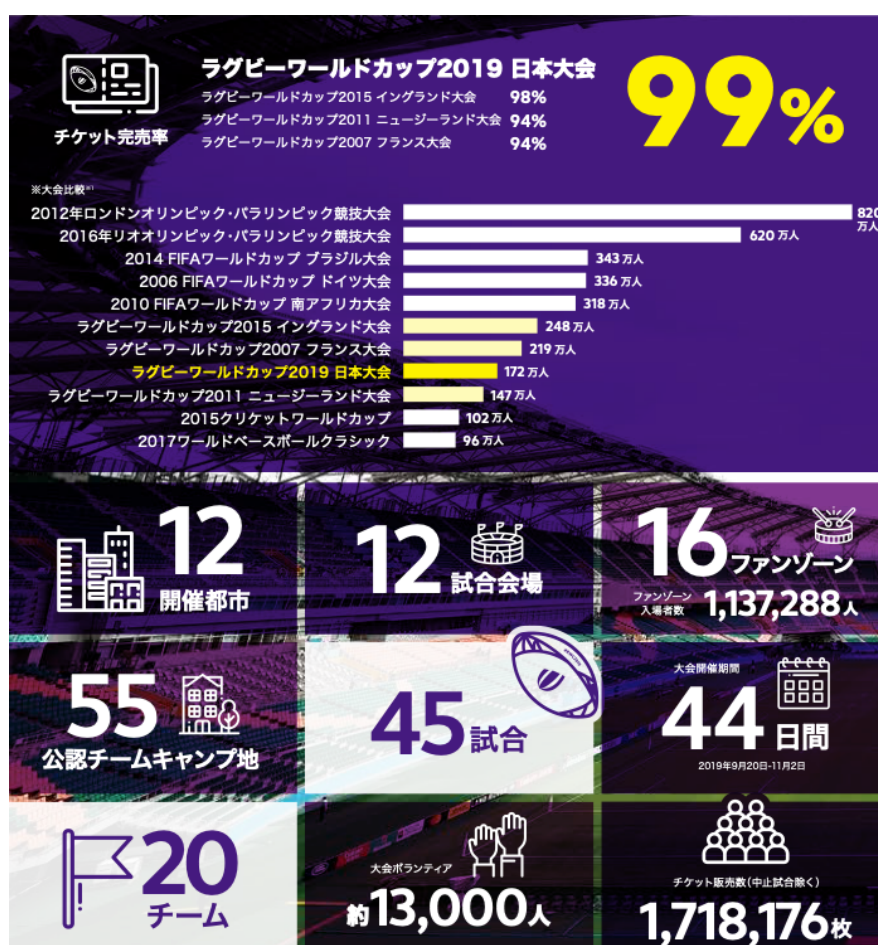


図 26 THE CONOMIC IMPACT OF RUGBY WORLDCUP 2019 より引用

1987 年第 1 回 RWC を開催してから、2023 年 RWC フランス大会で 10 回目となる。これまで、RWC は限られた国で複数回開催されてきた過去を持つ。2023 年フランス、2027 年オーストラリアが開催国として決定しているが両国とも 3 回目の開催国となっている。

表 27 ワールドカップ開催国一覧

開催国一覧		
1	1987	AUS / NZ
2	1991	ENG / FRA / SCO / IRE / Wales
3	1995	SA
4	1999	Wales(2)
5	2003	AUS(2)
6	2007	FRA(2)
7	2011	NZ(2)
8	2015	ENGLAND
9	2019	Japan
10	2023	FRA(3)
11	2027	AUS(3)
12	2031	America

1) 2002 年日韓ワールドカップ（サッカー）

Jリーグに目を向けると1989年にW杯招致に立候補しており、1993年にJリーグ開幕。2002年のサッカーW杯日韓大会の招致に成功によりスタジアム新設など大規模な整備が進んでいた。現在はノエビアスタジアムなどが、人工芝と天然芝のハイブリッド芝が採用されているが、ラグビーの場合人工芝の使用が認められている。MLRでは多く活用されており、世界最高峰 TOP14（仏）でも活用事例（パリのスタジアム Stade Jean Bouin）が確認できた。日本でも近年、東京・明治神宮外苑地区再開発計画で秩父宮ラグビー場移転が明記されており、秩父宮ラグビー場は屋内のスタジアムとなり、人工芝が採用される予定である。

サッカー界では、1991年にサッカーW杯招致活動がスタート。1993年にJリーグ発足。1996年にサッカーW杯開催国に決定した。初の共同開催となった2002年日韓W杯に向け、サッカースタジアム等の環境整備が急速に進んだ。実例としては以下10スタジアムの整備や新設が確認できた。

表 28 サッカーW杯招致とスタジアム整備事例

- | |
|--|
| 1.札幌ドーム/開場:2001年/収容人数:41,484人/2002年W杯:3試合実施
※北海道コンサドーレ札幌・北海道日本ハムファイターズ（現在移設中）
2.宮城スタジアム/開場:2000年/収容人数:49,133人/2002年W杯:3試合実施
※ベガルタ仙台 |
|--|

- 3.茨城県立カシマサッカースタジアム/開場:1993年改修:2001年/収容人数:40,728人
/2002年W杯:3試合実施
※鹿島アントラーズ
- 4.埼玉スタジアム 2002 /開場:2001年/収容人数:63,700人/2002年W杯:4試合実施
※浦和レッズ
- 5.横浜国際総合競技場/開場:1998年/収容人数:72,327人/2002年W杯:4試合実施
※横浜F・マリノス
- 6.新潟スタジアム/開場:2001年/収容人数:42,300人/2002年W杯:3試合実施
※アルビレックス新潟
- 7.静岡スタジアムエコパ /開場:2001年/収容人数:50,889人/2002年W杯:3試合実施
※ジュビロ磐田
- 8.大阪長居スタジアム/ 開場:1964年改修:1996年/収容人数:47,816人/2002年W杯:3
試合実施
※セレッソ大阪
- 9.神戸ウイングスタジアム/開場:2001年/収容人数:28425人（W杯開催時は42,000
人） / 2002年W杯:3試合実施
※ヴィッセル神戸、INAC神戸レオネッサ、神戸コベルコスティーラーズ
- 10.大分スタジアム/開場:2001年/収容人数:40000人（W杯開催時は43000人） /
2002年W杯:3試合実施
※大分トリニータ

第4章 考察

第1節 英仏米の特徴からみるリーグワンの強みと課題

イギリスやフランスなどの世界の主要リーグでは、新興リーグである MLR も含めサラリーキャップ制度が厳密に管理されており、違反をするとペナルティが課される状況である。様々な環境の変化により、PR や TOP14 では外国人選手が減少傾向にあり、MLR もリーグ及びクラブの予算規模が大きくないことから外国人選手を積極的に獲得するに至っていない状況であった。加えて、TOP14のように自国選手の育成・強化を目的に外国人選手の条件に一定の年齢に達するまでにフランスでの活動経験を求めること等の条件が課されることになり、TOP14における自国選手を育成・強化する傾向は強まるものと予測される。PR でも Marquee player の縮小に加え、サラリーキャップの縮小により、海外の名選手や、国内の名選手をクラブにとどめることが困難な状況にある。今与えられた規定の中で、南アフリカやサモア・トンガ・フィジーなどの外国人選手枠とカウントされない選手の獲得と、サラリーキャップの限度額に反映されない育成枠等を使用し、国内のアカデミーや、ホームグロウンの選手を強化していく方向性であると考ええる。

また、アメリカの MLR では外国人枠に寛容なスタンスをとっており、リーグワンの場合も、サラリーキャップ制度はペナルティが課されないことから、PR、TOP14、MLR と比較して外国人選手を好条件で獲得しやすい環境にある。また 2023 年には、RWC2023 フランス大会が開催され、大会後には強豪国の選手の動きが活発になるため、ニュージーランドや南アフリカ、オーストラリア等の南半球はもちろんのこと、これまで来日に縁のなかったイギリスやフランスなど、強豪国の選手を獲得できる状況であることから、リーグワンは、今後も世界のトップ選手たちが集結する国際競争力の高いリーグとして成長できる可能性は非常に高いリーグと言える。

リーグの運営環境を比較すると、英仏は 2 万人程度のホストスタジアムを保有し、興行試合を開催するにあたって、開催日やキックオフ時間などに工夫が見られた。そのことも後押しし、TV の視聴率も非常に高額であった。英仏が、ラグビーが興行として成立している要因として、シーズンの開催期間が長く試合数が多いことで興行機会が多いことが挙げられる。またフランスは 14 クラブ中 12 クラブがラグビー専用スタジアムを保有している。英仏米共に、国土に対し各国特徴はあるものの、広域に各クラブが本拠地を置いている。これに対してリーグワンはリーグ開催期間が短く興行の機会が少ないことや、ラグビー専用スタジアムの数が限られている点に課題がある。また、米国は RWC2031 の開催をリーグの活性化に活かそうとしていることに加えて、MLS や NBA 等の成功モデルを参考にシングルエンティを採用し昇降格のない東西カンファレンス制を導入しクラブを拡大させること、リーグ主導のデジタル施策を中心としたマーケティング活動を行っていることが特徴として挙げられる。一方でリーグワンの立ち上げが RWC2019 年の 2 年後となったことや、新型コロナウイルスの影響なども受け結果的に観客数が伸び悩んでいる状況である。

第2節 ラグビー専用スタジアムの有効活用

日本のラグビー専用スタジアムは6つと少なく、専用スタジアムはリーグワン所属クラブの本拠地との距離も乖離していることから、現状の6カ所全てを活用することは現実的ではない。

そこで、ラグビーフットボールの長い歴史を作り上げてきた、東京の秩父宮ラグビー場、大阪の花園ラグビー場、RWC2019 で整備が進んだ熊谷ラグビー場の3拠点のセントラル開催を短期的に実施し、中長期的に小規模でも各クラブが自前のスタジアムを持てるような環境整備を行えば、各ホームタウンでの開催への移行をさせる方法を提案したい。現状、リーグワンの Division 1 は12クラブであり1節あたり6試合となる。従って、この3会場で週末1試合ずつ行うことができれば、3会場での運営が現実的に可能である。リーグ戦をセントラル開催で行うという例はあまりないが、Jリーグが発足した頃は東京に拠点がないクラブの国立競技場を使用していたことや、PRにおいてもリーグ発足時はホーム&アウェイ方式ではなかったことも踏まえると、段階的な発展を考えることが望ましいと考える。また、PRやTOP14の事例でも示し、現在リーグワンでも実施している、決勝戦などの集客が見込める試合では、国立競技場など大規模なスタジアムを活用することも考えられる。

また、各クラブが自前のスタジアムを保有できた際には、BRISTOL SPORTS のように地域クラブをホールディングス化しスタジアムの価値の最大化を図るような一体経営を行うこともひとつの運用策として考えられる。スタジアムを新設する際は、人工芝の活用が許可されているラグビーでは、TOP14の事例でも示したパリの Paris La Défense Arenaなどを参考に、他種目のスポーツとの共存の他に、音楽などのエンターテインメント部門との共存も十分に考えられる。また首都圏ではなく、地方都市の活性化という文脈でも、今後新たなスタジアム建設はコスト面を解消することにより、地域活性化の重要なコンテンツになると考える。

第3節 シングルエンティティ

MLR は MLS をモデルにしたことから、クラブの経営が安定しやすいシングルエンティティの形態を取り、リーグ主導で放映権やD2Cのようなデジタル施策を積極的に行うことでリーグの発展に寄与している。リーグワンの場合、興行権がクラブに移行されたもののクラブ単独の経営力には限界があり、リーグ主導での放映権料の獲得やチケットティング等のID基盤の共有をするようなリーグとクラブが協力した取り組みが必要である。現在リーグワンではチケットマスターの統一ができておらず、各クラブ異なるシステムを使っているため情報がサイロ化してしまっている。そのため、リーグとクラブが連携することによって、限られたデータを集約することによりビッグデータ分析などで潜在的なファンを、より増やすことが可能になると考える。また、チケットマスターの統一により来場者

が行うチケット購入フローが簡素化され、これまで各クラブで実施していたため困難であった、チケット購入の際のチケット発券手数料の軽減も可能になるため既存のファンのみならず、新たなファンや各クラブ、リーグにとってもメリットは大きいと考える。また安定的な会場確保に苦勞している現状下では、上記にも示したようにリーグ主導による 3 拠点のセントラル開催ができれば会場確保の課題の解決だけでなく、運営コストも抑えることができる経済的なメリットも得ることが可能である。現在 8 クラブが首都圏近郊、東海地方に 2 クラブ。関西に 2 クラブに本拠地を置く環境下で、毎週末興業試合を行うために開催地までの移動するコストを考えても効率的であると考え。また、まだまだ運営面・演出面などの経験値が少ない各クラブの開催地が集約されることにより経験値やノウハウを共有でき、将来各クラブのホストスタジアムで興業を行う際の安定したサービス提供や安心安全の運営にもつながる。興業を開催することと並行して、各クラブの運営スタッフやチケットイングスタッフの経験値を積むことができることや、各クラブでは実現することが困難な演出やイベント開催等も可能になり、非日常空間の創出、海外では多く活用されているホスピタリースペースを活用した、ビジネス面での活用も可能になる。

以前のリーグとの変化は、事業性を持つことであり地域貢献等の文脈を維持しながらも、クラブやリーグ、社会へ貢献するためにも、現状の環境下で最大のパフォーマンスを出す方法を提示することが重要であると考え。また、今後もリーグワンは世界各国スターが集結するリーグであることが予想されることから、日本国内中心であった放映権や、会場が定まらず告知しづらかった問題を解消し、アジアや世界カ国に向け放映権の販売や、旅行とスポーツを掛け合わせたホスピタリティーチケットの販売などによるインバウンド等も含め、国内外に発信することが重要であると考え。

第 4 節 リーグと代表戦の日程

今後リーグ戦の興行回数が少ないことはクラブにとっては、チケット収入やスポンサー収入の伸び悩みにつながりクラブ経営に大きく影響することが懸念される。リーグワンの場合 1 月～5 月までリーグ戦が行われ 6 月以降代表戦が開催される日程であるが、リーグ戦と代表戦が共存できる形を検討することが望ましい。試合数を増やすことにより会社の予算が膨らむという従来の考えではなく、事業として進めることで収支を正常化させることが大前提である。その上で PR や TOP14 のようにクラブの活動と代表の活動を兼務するための、ルール作りをすることで代表とリーグの活動が共存できる形を模索する必要がある。ルール作りを行う際は、PR の事例でも示したように、リーグ(リーグワン)・日本協会(代表活動)・選手会が対話を持ってルール設定や、日程調整を行うことが望ましいと考える。

MLR が今後 RWC2031 を機にマーケットが拡大することは容易に想像がつく中で、リーグワンや協会が策を打たないと、日本は再び RWC2015 年以前のように難しい局面を迎えることになる。これまで RWC2019 自国開催成功のために、日本代表を中心としたスケジ

ルールで日本ラグビー界は進んできた。筆者もこのことについては大賛成であったが RWC2019 日本大会を終えた今、今後どうすることがラグビー界やスポーツ界、または社会にとって貢献できるかを考えなくてはならない。アジアで RWC を初開催し、偉業を成し遂げたホスト国としての責任は、我々にはあるのだと考える。

第5節 RWC 再招致に向けた理念の設定

RWC は、これまでの歴史を見ても再招致が 20 年以内に十分に考えられ、日本協会も意志を表明している。そこで、次の招致に向けて理念を掲げることが重要である。

RWC2019 では日本代表が世界と肩を並べることが大きな目標であったが、次の開催に向けては、リーグワン各クラブのホームタウンにおけるラグビーの普及とスタジアム整備を目標とすることで、RWC 開催を契機にリーグワンが活性化し日本ラグビー界全体が発展するような将来像を提案する。

現在、2027 年オーストラリア大会、2031 年のアメリカ大会までは決定しているため最速で 2035 年への招致が可能となる。2035 年までに 12 年。2039 年 16 年という時間軸で考えた際に現状のスピードでは、2019 年大いに盛り上がり大成功に終わっても持続性はない状態へと後戻りしてしまうことが考えることから、RWC 再誘致がトリプルミッションである、普及(スタジアム整備やラグビー人口拡大)資金(リーグや各クラブの収入拡大)勝利(世界トップの選手がプレー)の循環を生み出し、再誘致にて再び RWC 日本大会開催実現がこれらの好循環を生み、ラグビーの発展や社会への貢献とつながるものだと考える。

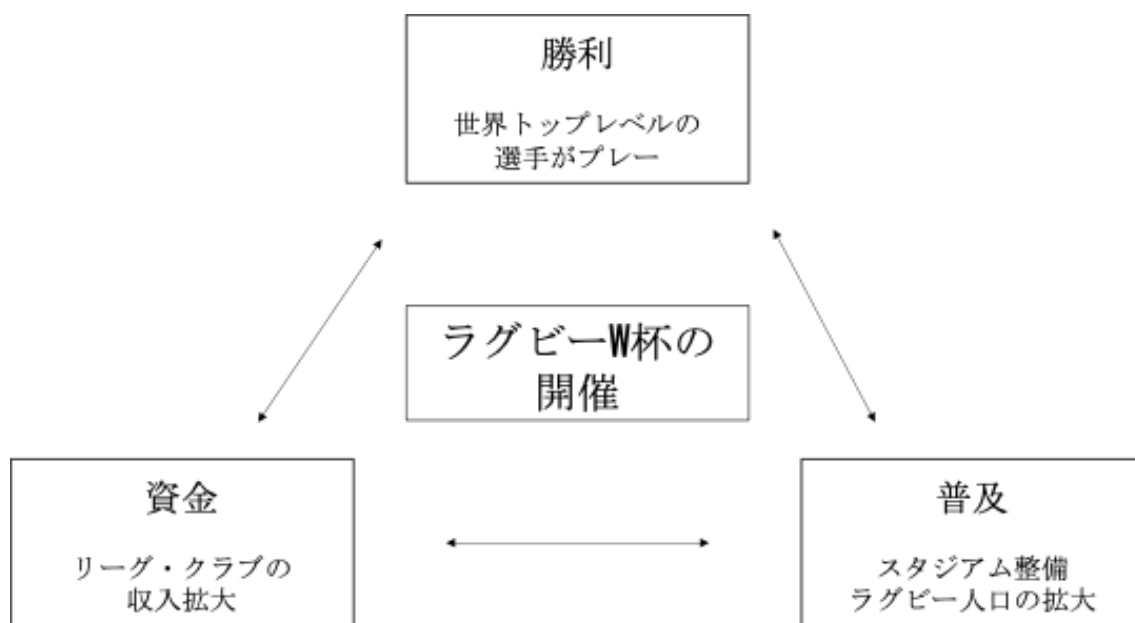


図 27 RWC の再開催とトリプルミッションの循環

第6節 本研究の限界と今後の課題

本研究では、英仏米日の最高峰リーグについて文献調査を中心に行ってきたが、英仏米日のリーグ以外にも主要なリーグは南半球やヨーロッパにも存在することや、本研究では英仏米日の下部リーグについては触れていないことなどから、更なる調査が必要である。またリーグワンが世界のプロリーグに類を見ない形で、構成されていることから明確な結論を出すことが困難であり、あくまでも私見にすぎない。そのため今後多くの方々に意見を頂戴し、日本ラグビー界が発展することに寄与することができれば本望である。

第5章 結論

英仏米の事例から、リーグワンの成長策としてラグビー専用スタジアムの整備と活用、リーグ主導のマーケティング活動、代表戦と共存できる試合日程の3つを提示した。RWCの再招致がこれらの実現可能性を高め、我が国のラグビー界の強化、資金、普及の好循環に寄与すると考える。

謝辞

本論文の作成にあたり、多くの方々にご指導ご鞭撻を賜りました。

指導教員の平田竹男教授には、入学を迷っていた私の背中をそっと押していただき、入学前から今日まで親身になってのご助言、ご指導に対しここに深謝の意を表します。

中村 好男先生、児玉 ゆう子先生、並びに畔蒜 洋平先生には、本論文の作成にあたり、副査として適切なご助言を賜りましたこと、本当に感謝しております。

現地調査では、Bristol Beers のスタッフの皆様には、シーズン中のお忙しい中、施設の案内やクラブのマーケティングや課題に対し情報など大変貴重なご助言を頂きました。ここに厚く御礼申し上げます。

最後に、平田ゼミ研究室の学生修士の方々、同期の皆様へは、本研究の遂行にあたり多大なご助言、ご協力頂きました。ここに誠意の意を表します。

この研究、そして何より皆様との出会いを大切に今後とも精進して参ります。

ありがとうございました。

参考文献

- Major League Rugby details growth across key areas in 2022 season <https://www.sportcal.com/news/media/major-league-rugby-details-growth-across-key-areas-in-2022-season/> 2022 年 12 月 27 日
- アメリカのラグビーを考えるために:研究のための序章 ; https://opac.ll.chiba-u.jp/da/curator/102516/102516_ONISHI.pdf (最終閲覧日 2022 年 12 月 27 日)
- NTT ジャパンラグビー リーグワン 2022-23 の大会概要 ; <https://league-one.jp/news/1684> (最終閲覧日 2022 年 12 月 27 日)
- IN-SEASON BREAKS INTRODUCED AS ENGLISH PROFESSIONAL RUGBY SEASON CONFIRMED ; <https://therpa.co.uk/news/2018/10/in-season-breaks-introduced-as-english-professional-rugby-season-confirmed/> (最終閲覧日 2022 年 12 月 27 日)
- RAPPORT DNACG 2021 – UCPR ; https://ucpr.fr/wp-content/uploads/2021/07/rapport_annuel_dnacg_2021.pdf (最終閲覧日 2022 年 12 月 27 日)
- English rugby to introduce mandatory in-season breaks in major boost to player welfare <https://www.therugbypaper.co.uk/all/domestic-club-rugby-union/31318/english-rugby-to-introduce-mandatory-in-season-breaks-in-major-boost-to-player-welfare/> (最終閲覧日 2022 年 12 月 27 日)
- RUGBY ATTENDANCES: ARE THEY GROWING OR IN DECLINE ; https://sportcal.nridigital.com/sportcal_insight_sep19/rugby_attendances_are_they_growing_or_in_decline (最終閲覧日 2022 年 12 月 27 日)
- Stadiums of Major League Rugby 2022 ; <https://www.americasrugbynews.com/2022/02/10/stadiums-of-major-league-rugby-> (最終閲覧日 2022 年 12 月 27 日)
- RECORD RUGBY WORLD CUP ATTENDANCE AT WEMBLEY STADIUM ; <https://www.rugbyworldcup.com/news/95779> (最終閲覧日 2022 年 12 月 27 日)
- 日本ラグビーのファンエンゲージメント事業を行う新会社 ; <https://league-one.jp/news/1709> (最終閲覧日 2022 年 12 月 28 日)
- 大会概要及びアーリーエントリーについて ; <https://league-one.jp/news/1684> (最終閲覧日 2022 年 12 月 28 日)
- 選手契約および登録に関する規程 ; https://league-one.s3.ap-northeast-1.amazonaws.com/file/menu/2603_6247c67f155e8.pdf (最終閲覧日 2022 年 12 月 29 日)

- Canal+ retain Top 14 broadcasting rights in mega deal ;
https://www.sportspromedia.com/news/top-14-tv-rights-canal-france-2026-27-season/?zephrr_sso_ott=erxXQa（最終閲覧日 2022 年 12 月 30 日）
- what score for the final of the Top 14 ; <https://newsinfrance.com/what-score-for-the-final-of-the-top-14/>（最終閲覧日 2022 年 12 月 30 日）
- SALARY REGULATIONS ; <https://d2cx26qpfwuhvu.cloudfront.net/premier/wp-content/uploads/2020/11/16094417/Salary-Regulations-2021-22-Final-Approved-28.10.20.pdf>（最終閲覧日 2023 年 1 月 2 日）
- Premiership squads and homegrown percentages for 2019/20 ;
<https://www.rugbypass.com/news/analysis-premiership-squads-and-homegrown-percentages-for-2019-20/>（最終閲覧日 2023 年 1 月 4 日）
- Percentage of English players in Premiership squads ;
https://www.reddit.com/r/rugbyunion/comments/i8gcfq/percentage_of_english_players_in_premiership/（最終閲覧日 2023 年 1 月 4 日）
- Major League Rugby Homegrown Player Policy ;
<https://www.majorleague.rugby/major-league-rugby-homegrown-player-policy/>（最終閲覧日 2023 年 1 月 4 日）
- 熊谷ラグビー場改修工事 ; <https://www.sankei.com/article/20160511-3F4LWGW5LZNGZLETVCPR7IHPQE/>（最終閲覧日 2023 年 1 月 4 日）
- Twickenham Stadium 公式サイト ; <https://www.twickenhamstadium.com>（最終閲覧日 2023 年 1 月 5 日）
- Stade de France 公式サイト ; <https://www.stadefrance.com/en>（最終閲覧日 2023 年 1 月 5 日）
- FAQ section(PR) ; <https://www.premiershiprugby.com/about-premiership-rugby/about-us/faqs/>（最終閲覧日 2023 年 1 月 6 日）
- THE CONOMIC IMPACT OF RUGBY WORLDCUP 2019 ;
https://assets.ey.com/content/dam/ey-sites/ey-com/ja_jp/news/2020/pdf/ey-the-economic-impact-of-rugby-world-cup-2019-j.pdf（最終閲覧日 2023 年 1 月 6 日）
- Overseas in Euro's : <https://www.ruck.co.uk/study-reveals-premiership-club-highest-players-overseas-europes-top-leagues/4/>（最終閲覧日 2023 年 1 月 10 日）
- MLR 公式サイト ; <https://www.majorleague.rugby>（最終閲覧日 2023 年 2 月 10 日）
- Premiership Rugby 公式サイト ; <https://www.premiershiprugby.com>（最終閲覧日 2023 年 2 月 10 日）
- JANAN LEAGUE ONE 公式サイト ; <https://league-one.jp>（最終閲覧日 2023 年 2 月 10 日）

TOP14 公式サイト ; <https://www.lnr.fr/rugby-top-14>(最終閲覧日 2023 年 2 月 10 日)

Bristol Sports 公式サイト ; <https://www.bristolbearsrugby.com>(最終閲覧日 2023 年 2 月 10 日)

World Rugby 公式サイト ; <https://www.world.rugby>(最終閲覧日 2023 年 2 月 10 日)